

石　　動　　遺　　跡
平成 7 年度発掘調査概報

1 9 9 6

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成7（1995）年度に実施した「石動遺跡発掘調査」の概報である。
- 2 調査は新潟市教育委員会が主体となり埋蔵文化財センターが主管した。
- 3 調査で得た資料は新潟市教育委員会が埋蔵文化財センターに一括して保管している。
- 4 本書の作成にあたっては、廣野耕造（埋蔵文化財センター主事・文化財専門員）と樋口優子（同）が内容について協議の上、廣野が編集・執筆した。
- 5 事前協議・現地調査から本書の作成にいたるまで、多くの方々・機関よりご指導・ご協力をいただいた。

凡 例

- 1 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
- 2 出土遺物の実測図・写真の縮尺は、特にことわりのない場合1／3である。
- 3 遺物観察表は、実測図を掲載したもののみについて作成した。「法量など」でカッコ付きの数値は、遺物の欠損が多いため参考値としたものである。
- 4 遺物の番号は、写真図版のものと一致している。

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 調査方法	
1 グリッド設定	1
2 地区割り	2
3 調査の進行状況（概略）	4
III 調査結果の概要	
1 遺跡及び調査結果の概要	4
2 遺構と出土遺物	
(1) A地区	6
(2) B地区	10
3 その他の遺物	
(1) 弥生時代	13
(2) 古墳時代	18
(3) 平安時代	20
IV ま と め	
1 遺跡の形成について	24
2 各時代の概要について	24

I 調査に至る経緯

石動遺跡は新潟市本所字居浦845ほかに所在する。1993（平成5）年、新潟市教育委員会では遺跡の隣接地を都市計画道（県道）下山・江口線が通る予定であることを把握し、大略以下のような流れで関係各機関と協議を重ねた。

1993（平成5）年

11月15日 新潟県新潟土木事務所道路課（以下「新潟土木」）と協議。市教委では現地踏査を実施することとする。

11月20日 現地踏査実施。平安時代須恵器破片の散布を確認。

1994（平成6）年

8月28～30日 試掘調査実施。

9月2日 新潟県教育庁文化行政課（以下「県教委」）に調査結果を報告、本格調査が必要であるとの指導を受ける。

同日、新潟土木と試掘調査結果をもとに協議。道路部分2,600㎡について本格調査の実施を決定。

1995（平成7）年

4月 市教委、本格調査等を担当する機関として埋蔵文化財センターを発足させる。

5月22日 本格調査実施のため、法第98条の2に係る発掘通知を県教委を経由して文化庁に提出。

以上により、石動遺跡の発掘調査を、1995年6月5日から同10月31日までの予定で実施することとなった。発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

調査主体 新潟市教育委員会

埋蔵文化財センター（所長 堀川 滉一）

調査担当 廣野 耕造（埋蔵文化財センター主事・文化財専門員）

調査員 樋口 優子（埋蔵文化財センター主事・文化財専門員）

田中 恵津子（埋蔵文化財センター嘱託）

発掘作業員 地元有志

整理作業参加者（調査担当・調査員以外）

森 良子（埋蔵文化財センター嘱託）

大野 すみ子 桑野 多真美 土佐 静子 土佐 洋子 土佐 陽子

成沢 由香里（以上整理作業員）

II 調査方法

1 グリッド設定（第2図）

まず、調査区の西側及び北側側縁をグリッドの基準線とし、調査区全体に10mのメッシュを構築した。10m大グリッド内は2m四方の小グリッドに分割し、それぞれ北西隅から始めて南東端で終わるように1～25まで番号をふった。基準杭の打設は業者に委託した。調査区に隣接して2点の基準杭を打ち、それぞれ最寄りの三角点2点とGPSを用いて公共座標系による座標を出した。水準についても近隣の国家水準点（三等）からの簡易水準測量を行い、基準点及び各基準杭の頭の絶対高を出した。

2 地区割り (第2図)

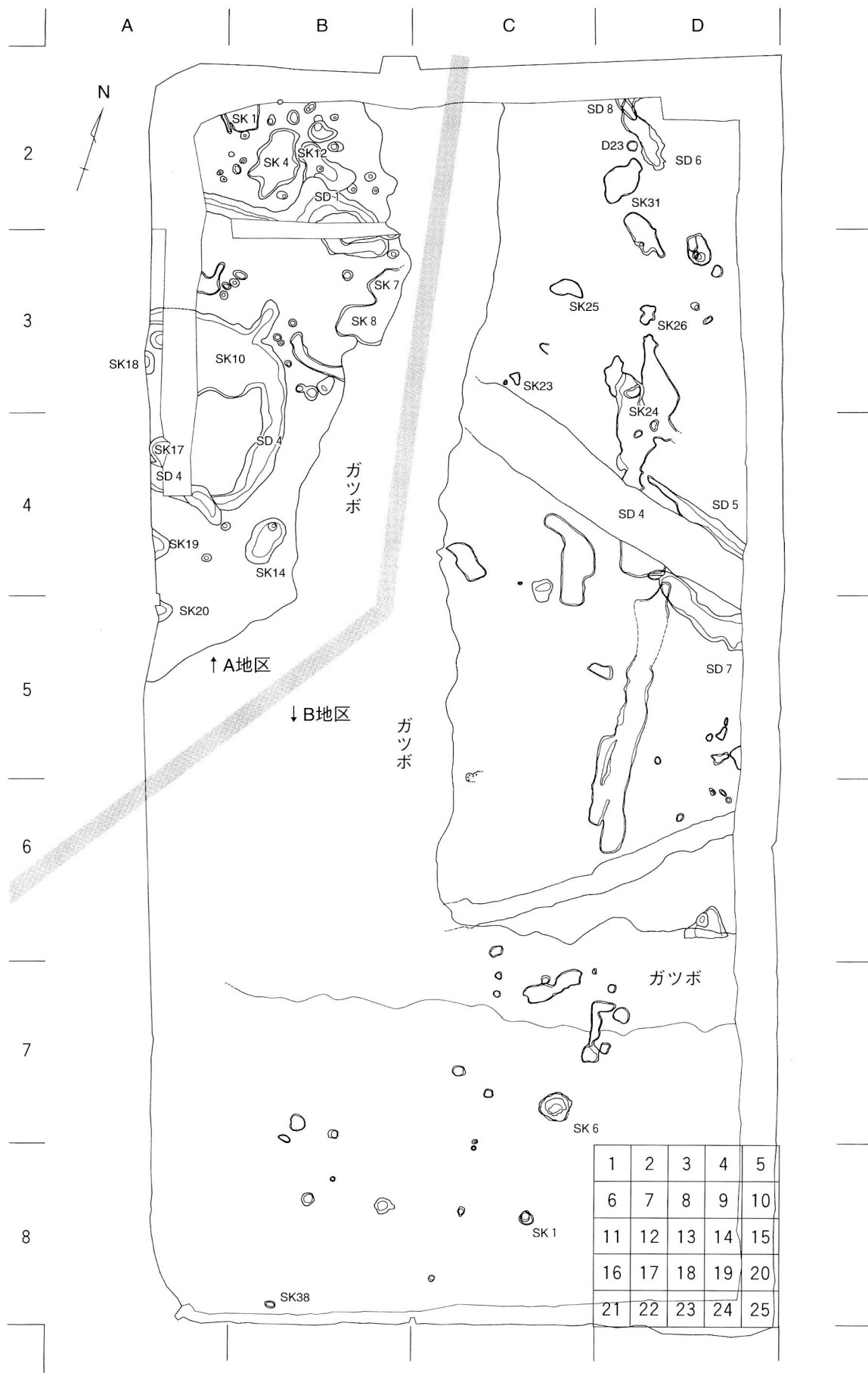
試掘調査の結果では、①基盤層が粘土ないしシルト層のトレンチと、②砂層になっているトレンチとがみられた。②の砂層は埋没した新砂丘の一部と考えられ、①の粘土・シルトとは湧水の状態や遺物の時期なども大いに違うという予想が立てられたので、排土処理等の便宜も考え②の範囲をA地区、①の範囲をB地区として、完全に分けて調査を進めることとなった。よって、遺構名もそれぞれ別個に命名してあるが、今次報告では特に統一せず、必要に応じて地区名を併記し、記述することとしたい。



第1図 石動遺跡と周辺の遺跡 (1 : 30,000)

	遺 跡 名	所 在 地	時 代
1	石 動	新潟市本所字居浦719他	弥生・古墳・平安・中世
2	山 木 戸	〃 山木戸4丁目443他	古墳・平安・中世
3	竹 尾 西	〃 竹尾4丁目2-19他	平安
4	寺 山	〃 寺山字浦沢963他	平安
5	下 場	〃 下場本町432他	平安・中世
6	猿ヶ馬場 A	〃 猿ヶ馬場1丁目414-3他	平安・室町
7	猿ヶ馬場 B	〃 猿ヶ馬場2丁目687他	鎌倉～江戸
8	岡 山 の 石 仏	〃 岡山字中山594他	中世

表1 周辺の遺跡



第2図 石動遺跡調査区設定状況及び遺構分布 (1 : 300)

3 調査の進行状況（概略）

1995（平成6）年

6月26日～7月3日 B地区の表土除去等準備作業。

7月4日～10月11日 B地区包含層（II～III層）の掘削・遺構調査。平行してA地区の表土除去（9月2日～9月26日）。

9月28日～11月29日 A地区包含層（VII～VIII層）の掘削・IX層上面の遺構調査。

11月23日 現地説明会実施。参加者400名。

11月24日 大部分の機材を撤収。

11月29日 全作業終了。

III 調査結果の概要

1 遺跡及び調査結果の概要

遺跡の立地 石動遺跡は石山砂丘列東端付近の島状の小砂丘に立地している。この石山砂丘は、阿賀野川以東で新砂丘II-2列と呼んでいるものに対比される。ただし、1994（平成6）年、新潟市教育委員会が実施した範囲確認調査により、遺跡は従来の推定範囲より大きく東に広がり、阿賀野川によって形成された自然堤防上にも遺構・遺物の検出される可能性があることが判明した。

石動遺跡の位置及びその周辺の遺跡については、第1図に示した。

既往の調査 石動遺跡では早くも大正年間に須恵器坏蓋が採集されている。1950（昭和25）年には内容は不明だが耕地整理などで遺物が出土したと伝えられ、ついで1953（昭和23）年、須恵器坏が採集されている。とんで1985（昭和60）年には分布調査により瓷器系陶器（越前焼か）のすり鉢、珠洲焼甕が採集され、1989（平成元）年、北高隣の畑から古墳時代の土師器（甕、赤彩のある壺、高坏ないし器台など）が採集されるにおよんで、当遺跡は古墳時代から中世までの複合遺跡と認識されるにいたり、1994（平成6）年には新潟市史資料編に記載された。その後、前述のとおり開発に先立つ範囲確認調査が実施され、弥生時代の遺構・遺物も存在することが確認された。

調査結果の概要（A地区） 遺物包含層はVII層（黒色砂層）及びVIII層（漸移層）の2層であった。いずれも弥生時代中期から後期にかけての土器が出土遺物の大半を占め、そこに古墳時代前期の土師器が若干混じるという傾向を示す。

遺構確認面は基盤層であるIX層上面で、出土遺物からみると大半の遺構が古墳時代前期に属する。従って、新旧関係を考えれば遺構は本来VII層上面（ないしそれより上のレベル）から掘り込まれていたことになるが、黒色砂層中では遺構の検出が難しく、IX層上面での検出となった。なお、A地区基盤層の一番高いところでは絶対高約-0.7mを測る。

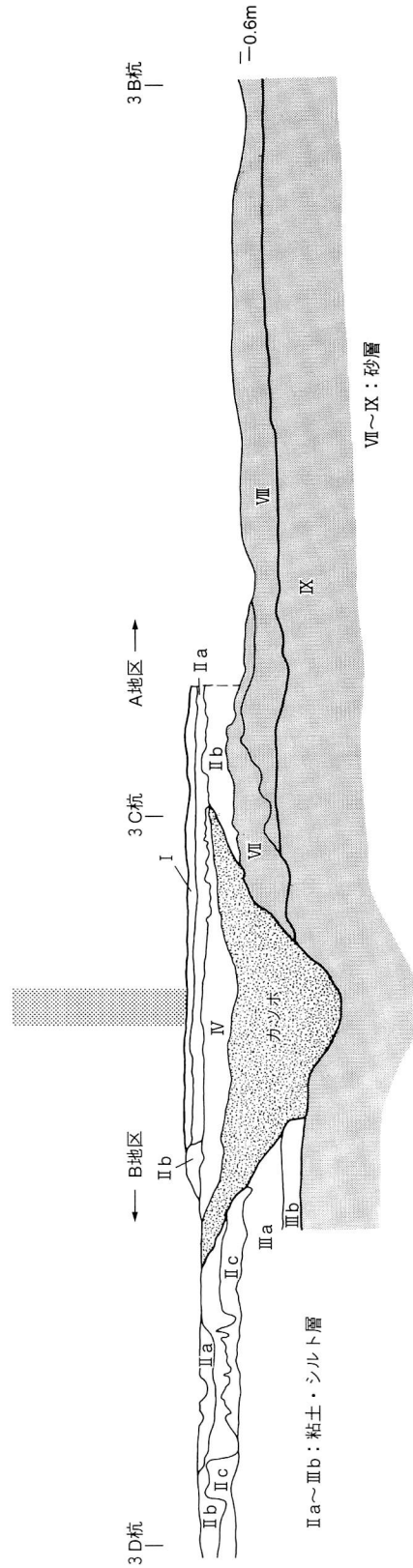
遺構分布はどちらかといえばA地区の北側で濃密だが、ほぼまんべんなく広がっているといつてよい。不定形で浅い土坑（SK1・SK4・SK7・SK8・SK10・SK12など）と、比較的しっかりと掘り込まれた溝状遺構（SD1・SD4など）が目立つ。

A地区の東側及び南側は砂丘の端部であることを示すように急激に落ち込んでおり、後述するB地区の自然堤防との間にできた溝状の地形には、腐食しきらないマコモなどの植物の堆積（ガツボ）がみられる。

調査結果の概要（B地区） 包含層はII層（シルト）で、色調や粘度によりa～cの3層に細分できる。途中、IIa層上面とIIc層上面で若干の遺構が確認されたので、必要に応じて精査し、遺構調査を行いながら包含層の掘削を行った。遺構・遺物ともに平安時代～中世までの幅を持っている。

最終的な遺構確認面はIIIa層上面で、7ライン以北で特に遺構分布が濃くなる。不定形で浅い大形の土坑（SK24など）をはじめとする各種の土坑、小形の溝（SD5・SD6・SD8など）が主である。

7ライン以南には小ピットが点在する程度だが、7ライン付近にはガツボの堆積した溝状の地形があり、7ライン以南と以北を分断している（写真図版4下、写真図版5）。



第3図 調査区内における東西方向セクション模式図（3ラインでのセクション 1：100）

2 遺構と出土遺物

石動遺跡全体で検出された遺構は土坑（SK）が51、ピット（P）が43、溝（SD）が10だった。ここでは主要遺構について記載する。

(1) A地区

遺構は全てⅨ層上面で確認している。

SD1

概要（第2図、写真図版19） V字形の断面を持つ溝状遺構。ほぼ西から東へ走っており、2B23グリッド付近で鍵の手状に屈曲し、東側は3ラインを越えたあたりで緩やかに浅くなり切れている。西側は調査区外までのびているので全体の形状は不明である。SK12を切っている。

遺物 弥生土器細片数点（小松式・天王山式）、古墳時代前期の土師器細片（甕・壺）、及び炭化物、チップ、フレイク、石片、骨片、木片がごく少量出土している。いずれも細片なのでここでは資料化しない。

SD4

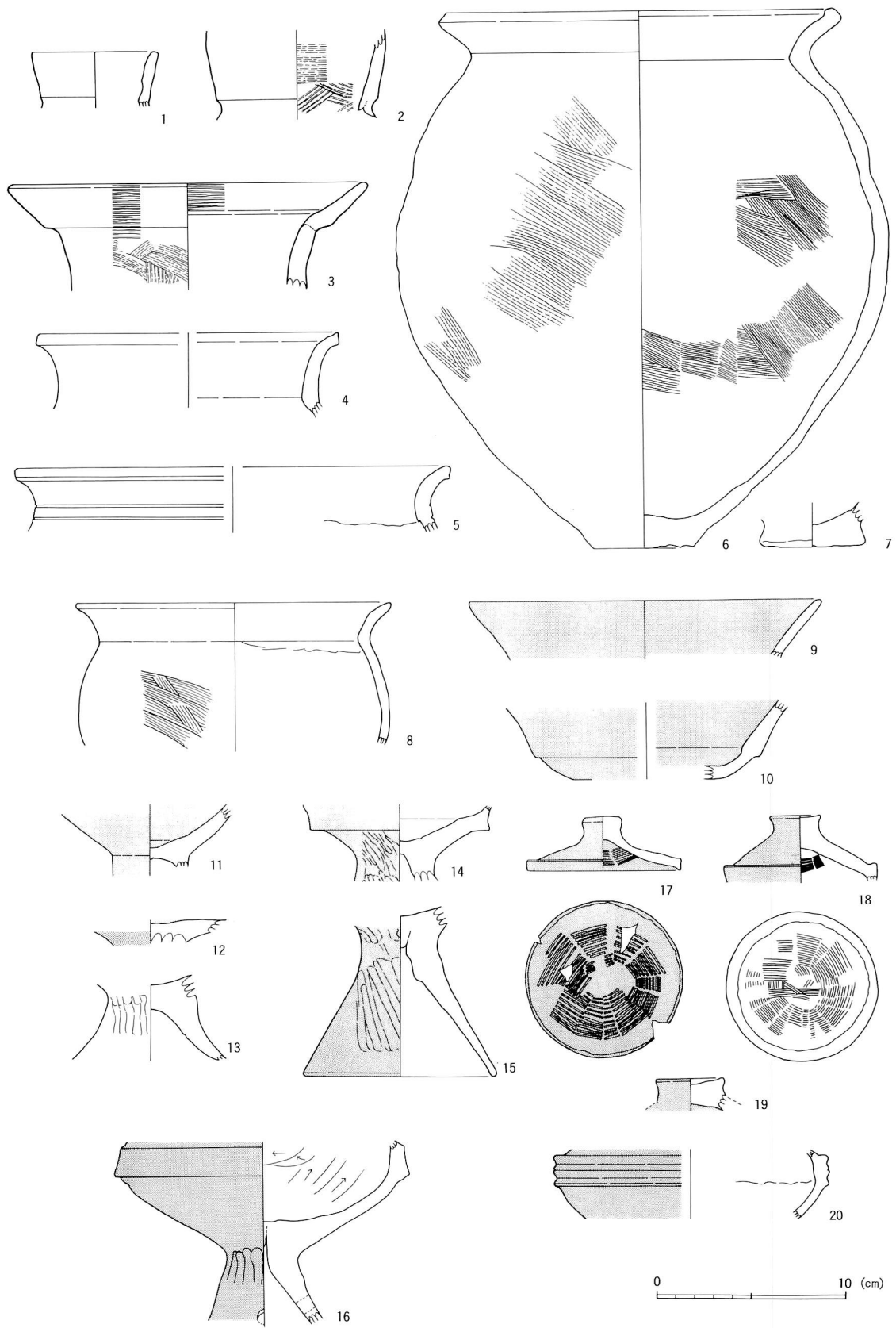
概要（第2図、写真図版15上） 調査区西端の3A13グリッド付近から4B2グリッドを目指してほぼ円弧状にのび、そのままBラインに至った付近でやや強く屈曲し、4A8グリッド付近で調査区外に続いていく。全体としてはいくぶんゆがんだ円形を呈するものと推定される。SK10を切り、SD5に切られている。

遺物（第4図） SD4からは古墳時代前期の土師器が多数出土している。甕、壺のほか、高坏や器台といった祭祀用具の存在が目立つ。主なものを図示した。

小形壺（1・2） いずれも口縁部付近のみ残存。

壺(3) 3は口縁が端部付近で外側に強く屈曲して開く。内外面に横方向ないし縦方向のハケによるナデ。

図版No.	出土遺構地	出土層位	種別	器種など	遺存	法量など（長さ：cm、重さ：g）				胎土			成形・調整など	備考
						口径	器高	底径	その他	混入物・粒子等	色調	焼成		
1	SD4(A地区)	2	土師器	小形壺	口縁のみ1/5	6.8				雲母	赤褐	堅	外面ハケ	
2	SD4(A地区)	2	土師器	小形壺	口縁のみ1/3	9.6				径1~2mmの長石	にぶい黄橙	堅	内外面ハケ	
3	SD4(A地区)	1	土師器	壺	口縁のみ1/10	19.2				径1~2mmの長石	黄橙	普通	内外面ハケ	
4	SD4(A地区)	1	土師器	甕	口縁のみ1/6	15.8				径1mmの小礫	明黄褐	堅		
5	SD4(A地区)	2	土師器	甕	口縁のみ1/12	22.8				長石、海綿骨針少量	明黄褐	堅		
6	SD4(A地区) SK10(〃)	2(SD4) 1(SK10)	土師器	甕	3/4	21.4	29.9	5.4		径1~2mmの石英、長石、燧灰岩、粗い砂	にぶい黄橙	軟	底部ヘラ削り	
7	SD4(A地区)	1	土師器	甕カ	底部のみ	5.2				砂、長石	にぶい黄褐	普通		
8	SD4(A地区)	2	土師器	甕	口縁・体部のみ1/5	16.8				長石、石英	茶褐	普通	外面ハケ	口縁・体部の外面にスス
9	SD4(A地区) SK18(〃)	2(SD4) 1(SK18)	土師器	高坏カ	杯部口縁のみ1/4	18.6				径1mmの小礫、少量の海綿骨針	にぶい黄橙	普通		内外面赤彩
10	SD4(A地区)	1	土師器	高坏カ鉢	体部1/5					雲母	明赤褐	堅	内外面ヘラミガキ	内外面赤彩
11	SD4(A地区)	2	土師器	高坏	脚部小片					雲母	明赤褐	堅	受部内外面ヘラミガキ	内外面赤彩
12	SD4(A地区)	2	土師器	高坏カ	脚部小片					雲母	明赤褐	堅	受部内外面ヘラミガキ	内外面赤彩
13	SD4(A地区)	1	土師器	器台	脚部					雲母、石英	橙	堅	外面ヘラミガキ	外面赤彩?
14	SD4(A地区)	1	土師器	器台	受部のみ	10.2				径2mmの小礫	明褐	堅	受部内外面ヘラミガキ	外面赤彩
15	SD4(A地区)	2	土師器	高坏	脚部	10.2				雲母、石英	橙	堅	外面ヘラミガキ	外面わずかに赤彩
16	SD4(A地区) SK10(〃)	2(SD4) 1(SK10)	土師器	壺	口縁1/4 脚部1/3					長石、小礫	明赤褐	堅	内外面ヘラミガキ	外面赤彩
17	SD4(A地区)	1、2	土師器	蓋	完形	8.1	2.9			粒子密、径1mm程度の石英など	にぶい褐	堅	外面ヘラミガキ、内面ミガキ及びカキ目	内外面赤彩
18	SD4(A地区)	2	土師器	蓋	縁部欠損	7.8	3.6			粒子密	にぶい赤褐	堅		
19	SD4(A地区)	1	土師器	蓋	つまみ部のみ					微細な石英、長石など	赤褐	堅	内外面ナデ	内外面赤彩
20	SD4(A地区)	1、2	土師器	細頸壺	体部小片				体部径(14.6)	小礫、径4mmの礫	にぶい橙	普通	外面ミガキ	外面赤彩



第4図 遺構出土遺物 (A地区 SD4) ※アミ点は赤彩を示す。

細頸壺（16・20） 両者とも脚を持つ細頸壺か。体部の周囲に幅広の突帯が巡り、20の突帯には3条の凹線が入っている。16の脚部には円形の透かし孔が開けられている。いずれも外面に赤彩。なお、16の破片の一部はSK10からの出土である。

甕（4～8） 4・5は口縁部付近のみ残存。6は完形で、体部の張りが比較的強く、器形が丸みを帯びている。内外面ともハケによるナデ、底部はヘラ削りされている。7は底部のみで甕かどうか疑問が残る。8は体部中央付近まで残存。体部の丸みが強く、外面にハケ。外面にはスス状炭化物が付着している。

高坏（9～12、15） 9・10は坏部。内外面ともよくヘラミガキされ、また赤彩されている。9の破片の一部はSK18から出土している。11～14は坏部と脚部との中間付近。11は内外面、14は外面に赤彩されている。15はあまり開きの大きくない脚部。外面に軽いヘラミガキと赤彩がみられる。

蓋（17～19） 17・18はほぼ完形の蓋。内面に明瞭なカキ目。17は内外面、18は外面に赤彩あり。19はつまみ部のみ残存しているが、内外面に赤彩が残る。

SK1

概要（第2図、写真図版15下） A地区北西端、2B6・11付近に位置する。遺構の約半分は排水路で切られてしまったので全容は不明だが、遺構面から底面までが約15cm程度と浅い土坑である。全体の平面形は1.7m四方の隅丸方形になるものと推定される。

遺物 弥生土器（甕）破片が少量出土している。

SK4

概要（第2図） 不定形だが南北方向にやや長く、主軸の北方向はわずかに東にふれている。南北方向は約3.5m、東西方向の最大幅は約2.3mを測る。深さは約20cmと浅い。南南西方向からSK5に切られている。

遺物 礫および炭化物がごく少量出土した。

SK7・SK8

概要（第2図、写真図版16上） 3B9・10・14・15グリッド付近に位置する。いずれも東半部はガツボへの落ち込みのところで切れており、全体形は定かでない。残存部から推定すると、SK7・8とも隅丸方形を呈するものと考えられる。SK7をSK8が切っている。SK7は深さ約10cm、SK8は深さ約30cmを測る。

遺物 土師器の甕、高坏等の破片が出土している。

SK10

概要（第2図、写真図版16下） 3A20・3B16グリッド付近にあり、SD4と一部切り合いが、セクション部分の攪乱があり、新旧関係は明らかにならなかった。SD4の一部との可能性もある。

遺物（第4図16、第7図45、写真図版23上の154～156） SD4の項でもふれたが、細頸壺の一部が出土している（16）。また、土師器壺の底部が出土している（45）。その他、図示はしないが弥生土器壺・甕の小片が出土した。石鏃3点（154～156）、フレイク、チップ、炭化物、微細な骨粉が検出された。

SK12

概要（第2図） 2B18グリッド付近に位置する。SD1に切られているので全体形は不明だが、北西－南東方向に主軸を持つ、やや細長い不定形をなすものと考えられる。深さは50cmを測る。

遺物 SK12では遺物は出土しなかった。

SK14

概要（第2図、写真図版17上） 4B16・17グリッド付近に位置し、北東－南西方向に主軸を持つ楕円形を呈する。長さ約2.4m、幅約2mを測る。深さは最大で50cmと比較的深い。

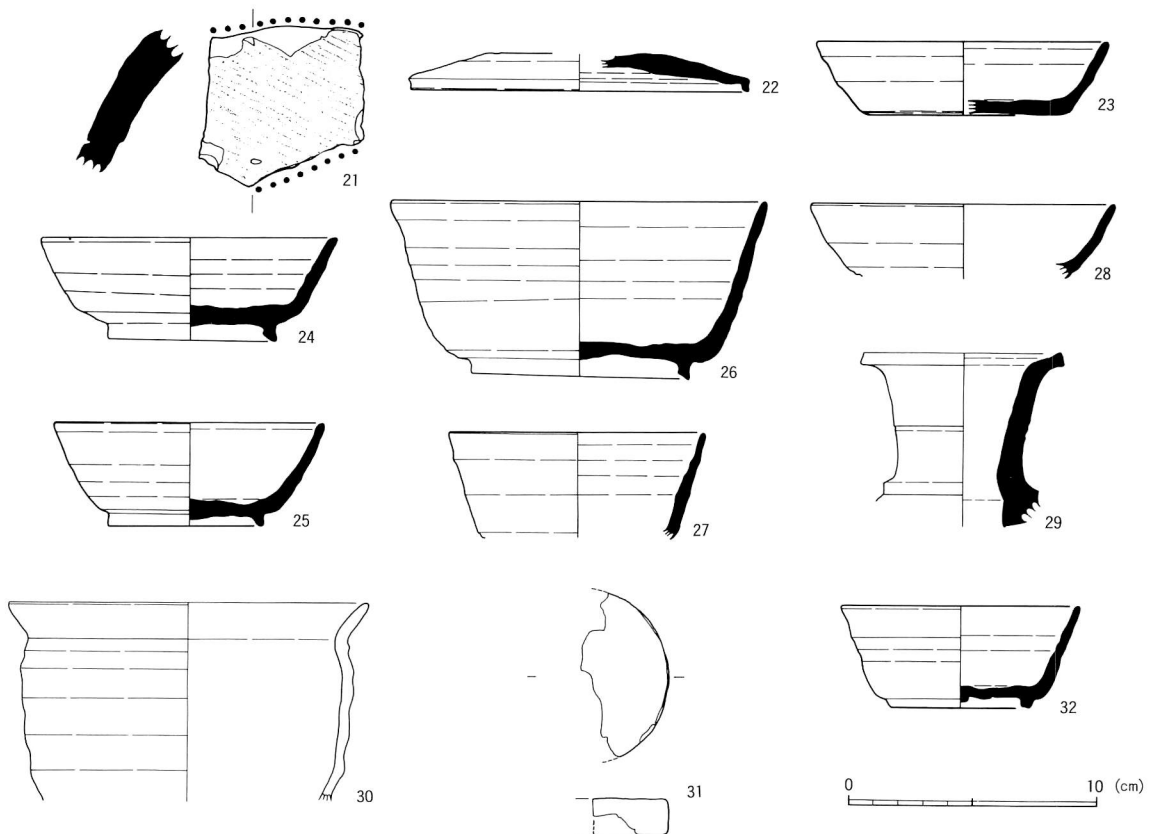
遺物（写真図版24上の152） 鉄石英製の管玉（152）が1点出土した。残存部長0.9mm、直径4mm、孔の径1mmを測る。その他、弥生土器の小片等が数点出土している。

SK17

概要（第2図、写真図版17下） 4A4・9グリッド付近に位置する。排水路で半分破壊されているが、直径約2mの円形プランを持つものと考えられる。深さは約1mと深い。

遺物（第7図47） 弥生土器甕が出土している。沈線文を持つ天王山式である。その他、弥生土器甕、土師器高坏、フレイクが出土しているが、小片のため図示できない。

図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種など	遺存	法量など(長さ:cm、重さ:g)				胎土			成形・調整など	備考
						口径	器高	底径	その他	混入物・粒子等	色調	焼成		
21	SD4(B地区)	3	珠洲焼	甕カ	体部小片					径1mm以下の雲母(多)	灰白	普通	平行タタキ	破断面の一部に研磨痕
22	SD5(B地区)	1	須恵器	蓋	1/4		2.5		径13.9	粒子粗、径1~3mmの長石	灰	堅	天井部ヘラ削り	
23	SD6(B地区)	1	須恵器	無台坏	口縁1/12 底部1/2	11.6	3.0	7.6		長石	暗灰	普通		
24	SD6(B地区)	1	須恵器	有台坏	5/6	12.0	4.3		台径6.8	径1mm以下の長石	暗灰	やや堅	底部ヘラ削り	
25	SD6(B地区)	1	須恵器	有台坏	3/4	10.8	4.3		台径6.7	径1~2mm以下の長石	淡灰(一部褐)	やや軟	底部ヘラ削り	
26	SD6(B地区)	1	須恵器	有台坏	7/12	15.4	7.3		台径8.8	径1mm以下の長石	淡灰	やや堅	底部ヘラ削り	
27	SD6(B地区)	1	須恵器	有台碗	口縁・体部1/6	10.4	4.1			長石	灰	普通		ゆがみあり
28	SD6(B地区)	1	須恵器	無台坏	口縁・体部1/6	12.1	3.0			長石	灰	普通		
29	SD6(B地区)	1	須恵器	壺	口縁・頸のみ	8.0	(5.9)			長石	暗緑灰	堅		
30	SD6(B地区)	1	土師器	甕	口縁2/5					径1~3mmの石英(多)、径1mmの長石	暗褐	普通	内外面ロクロ成形	口縁部内外面に炭化物付着
31	SD6(B地区)	1	土製品	紡錘車	2/5				径(7.2)軸穴(0.7)厚(1.5)重量(29.3)	砂粒(多)	にぶい黄橙	普通		
32	SD8(B地区)	1	須恵器	有台坏	1/2	9.7	4.2	5.6		径1mm以下の長石	暗灰	やや堅	底部回転ヘラ削り	



第5図 遺構出土遺物 ※ドットは研磨痕を示す。

S K 18

概要(第2図) 3 A18グリッドに位置する。西半分が調査区外にあるため全体形は不明だが、やや四角がかった直径1.2m程度の円形を呈すると考えられる。深さは約80cmを測る。

遺物(第4図9) S D 4の項でもふれたが、高坏の一部が出土している。また、弥生土器の甕破片、フレイクが出土した。

(2) B地区

B地区の基盤層は河川の氾濫に由来する粘土及びシルトで、これが自然堤防を形成している。遺構はII a層、II c層、III a層の各上面で検出された。出土遺物の内容から考えると、II a層の遺構は中世(14C)、II c層・III a層の遺構は平安時代のものが主体となっている。

S D 4・S D 5

概要(第2図) いずれもII a層からの掘り込み。S D 4は3 C23グリッド付近と4 D25グリッド付近とを結ぶ、幅約3.5mの大きな溝である。深さは約45cmを測る。S D 5はS D 4の北側を平行に走る幅約70cmの細い溝で、S D 4に切られている。深さは約15cmと浅い。

遺物(第5図21・22) S D 4からは平安時代～近現代の多くの遺物が出土しており、それがそのままこの遺構の性格(昭和20年代まで使用された用水路)を表している。21に示したのは珠洲焼甕の破片。破断面の一部が研磨されている(ドットで表現)。砥石の一種として使用したものか。22はS D 5から出土した須恵器蓋。

S D 6

概要(第2図、写真図版11上) II c層からの掘り込み。2 D 6グリッド付近に位置する。北側で調査区外に出ているので全長は不明。幅約75cm、深さ約30cmと非常に小さな溝である。

遺物(第5図23～32) 小形の遺構だが多くの遺物が集中して検出された。23～28・32は須恵器の有台・無台の坏・碗。いずれも残存部が非常に少ないことから、この遺構は廃棄用の土坑だったと推定される。29は須恵器壺、30は土師器甕。31は円盤状の土製品で、中央部に焼成前にあけられた孔の痕跡があり、紡錘車と考えられる。

S K 1

概要(第2図、写真図版6・7) III a層からの掘り込み。8 C 9・14グリッドに位置する。直径約70cm、深さ約50cmと比較的小形の土坑だが、底面からはムシロ状の編み物を燃やした跡と考えられる炭化物が多量に検出された。ただし、遺構の内面には熱による変質が認められない。他所で燃やした灰を廃棄したものと推定される。

遺物(写真図版22下の143～145・188・189) 青磁碗の破片(143)を一点検出した。連弁文の一部が観察される。また、珠洲焼すり鉢片(144・145)も出土している。木製品では、曲物の底板(188)が1点、下駄(189)が1点、出土している。

S K 6

概要(第2図、写真図版8) III a層からの掘り込み。7 C 19・20・24・25グリッドに位置する。直径約1.7m、深さ約0.8mを測る、かなり大形の土坑である。井戸という可能性もあるが、井戸枠その他構造物の痕跡はいっさい発見されていない。また、覆土からみると埋没は人為的ではなく自然に起こったと判断できる。

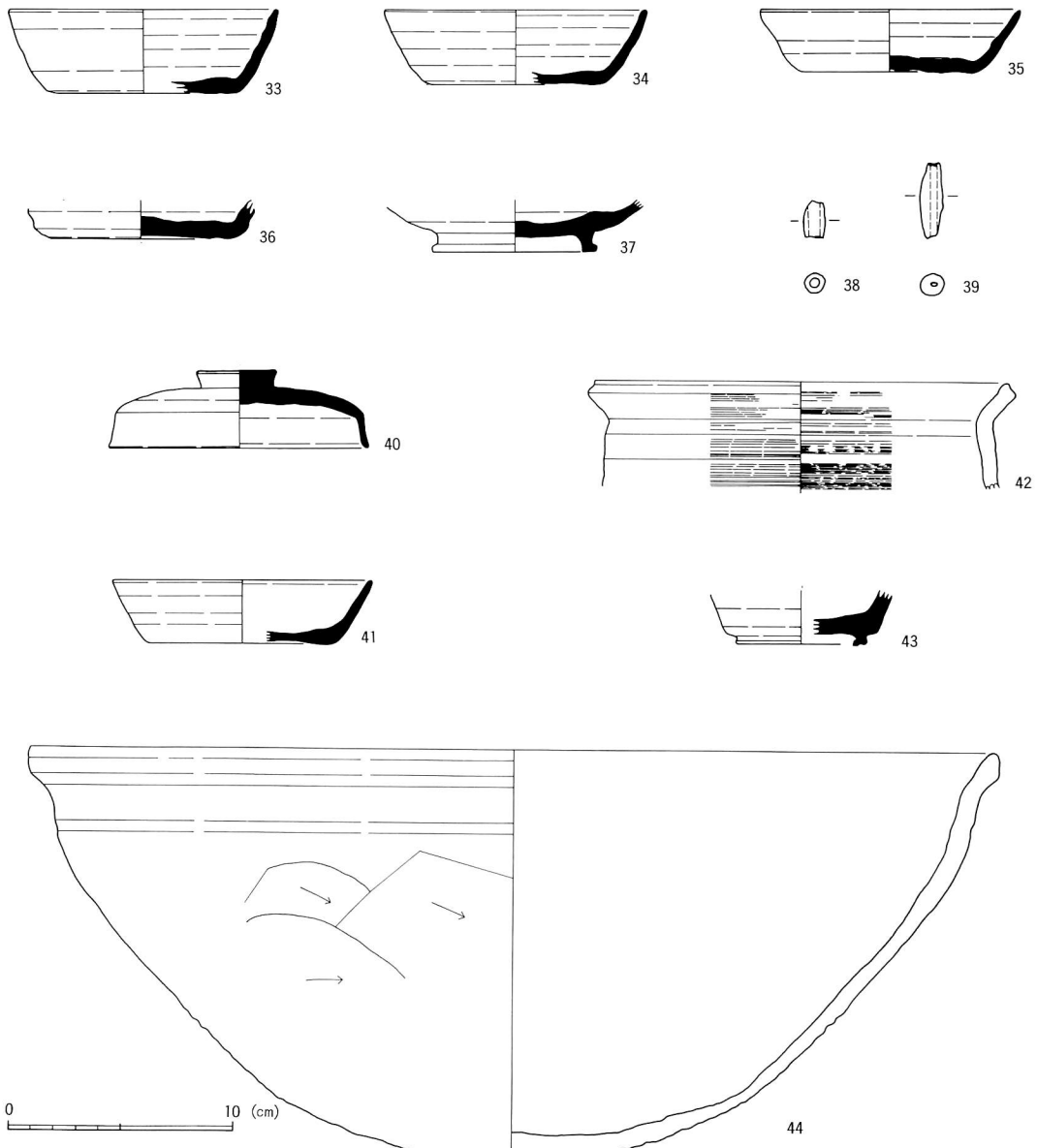
遺物 覆土の上層(2層)から多くの種子(モモ?)と須恵器坏の破片2点が検出されている。

S K 23

概要(第2図) II a層からの掘り込み。3 C 23グリッドに位置する。平面は底辺約80cm、高さ約50cmの三角形を呈し、深さは20cm足らずと小形の土坑である。

遺物(第6図40) 須恵器壺蓋(40)のほか、細片だが土師器甕が1点出土している。

図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種など	遺存	法量など(長さ:cm、重さ:g)				胎土			成形・調整など	備考
						口径	器高	底径	その他	混入物・粒子等	色調	焼成		
33	SK24(B地区)	1	須恵器	無台坏	1/4	11.7	3.8	8.6		極小の雲母	灰	軟	ロクロ成形、底部回転ヘラ切り	
34	SK24(B地区)	1	須恵器	無台坏	1/6	11.6	3.4	8.2		径1mm以下の石英	青灰	堅	ロクロ成形、底部回転ヘラ切り	
35	SK24(B地区)	1	須恵器	無台坏	2/3	11.4	2.8	8.4		細かい長石	青灰	普通	底部回転ヘラ切り	
36	SK24(B地区)	1	須恵器	無台坏	底部1/2		(1.7)	9.2		径1~3mmの石英	灰白	軟	ロクロ成形、底部回転ヘラ切り	
37	SK24(B地区)	1	須恵器	稜腕カ	底部2/3		2.4	7.3		粒子粗、径1~2mmの長石	淡灰	普通	底部回転ヘラ切り	
38	SK24(B地区)	1	土製品	土錘	1/2				全長(1.5) 最大径1.0 重量(0.9)		淡橙			
39	SK24(B地区)	1	土製品	土錘	両端小片				全長(3.4) 最大径1.0 重量(2.3)		灰白			
40	SK23(B地区)	1	須恵器	蓋	1/2		3.5		径11.6	細かい長石	灰	やや堅	天井部ヘラ削り	内面に自然釉
41	SK26(B地区)	1	須恵器	坏	1/3	11.5	2.9	7.7		径1mm以下の長石	灰	やや堅	底部ヘラ切り	
42	SK31(B地区)	1	土師器	甕	口縁3/5	18.2				径1~2mmの長石(多)	にぶい黄橙	普通	内外面ロクロ成形	
43	SK34(B地区)	1	須恵器	有台坏	底部1/2			5.8		径1mm以下の凝灰岩粒	灰	普通	底部回転ヘラ切り	
44	SK25(B地区)	1	土師器	鍋	1/6	23.6	18.1			長石(多)	にぶい褐	やや軟	外面削り、タタキ	



第6図 遺構出土遺物

S K 24

概要 (第2図) 3 C17から4 D 6・7にかけて、南北に広がる不定形の土坑。II a層上面からの掘り込み。全長は南端部がSD4に切られているので確定しないが、残存部だけで約8m、最大幅は約3.5mを測る。深さは最も深いところで約70cmを測る。かなり大形の土坑といえるが、その形状からみて明確な意図のもとに形成された遺構とは考えにくい。廃棄土坑と推定される。

遺物 (第6図33~39) SK24では多くの須恵器、土師器の破片が出土している。33~36は須恵器無台坏。37は稜碗の底部か。38・39は細形の土鉢。

S K 25

概要 (第2図) 3 C10グリッドに位置する。II a層からの掘り込み。全長約1.9m、幅約1mだが、深さ約10cmと非常に浅い土坑である。

遺物 (第6図44) 大形の土師器鉢が出土している。口縁部付近の調整をみると、ロクロ成形の可能性もあるが、遺存状態不良のため断定できない。

S K 26

概要 (第2図) 3 D12グリッドに位置する。南北約1.1m、東西約80cm、深さ約20cmの小土坑。

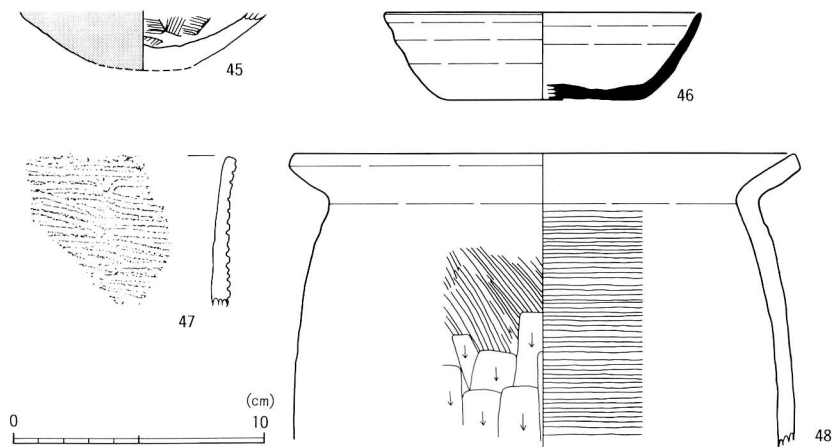
遺物 (第6図41) 土師器甕・坏、須恵器坏・坏蓋が破片数にして20数点検出されている。そのうち須恵器無台坏を41に掲げた。

S K 31

概要 (第2図、写真図版9下・10上) 2 D16グリッドに位置する。II a層からの掘り込み。南北約1.4m、東西約2m、深さ約20cmを測る。遺構中心部付近に焼土の固まりがみられ、土坑内で火を使用したと推定される。

遺物 (第6図42) 土師器甕、須恵器甕・坏等の破片が約40点出土した。そのうち残存部の多かった土師器甕を図示する。この土師器甕は口縁部付近のみの残存であるが、口唇部を下にした状態で焼土塊と一体化していた。

図版No.	出土遺構地	出土層位	種別	器種など	遺存	法量など (長さ: cm、重さ: g)				胎土			成形・調整など	備考
						口径	器高	底径	その他	混入物・粒子等	色調	焼成		
45	SK10(A地区)	1	土師器	壺	底部のみ					径1mm前後の石英、雲母	黄褐	堅	内外面ミガキ	外面赤彩残るが全体に黒色化
46	P23 (B地区)	1	須恵器	無台坏	5/12	12.5	3.5	7.6		石英(少)、長石(少)	淡灰	軟	底部回転ヘラ切り	
47	SK17(A地区)	1	弥生土器	甕	体部1/12					径1mm以下の長石	浅黄橙	堅		天王山式
48	P23 (B地区)	1	土師器	長胴甕	口縁1/3	20.0				径1mm前後の小礫多(長石など)	明黄褐	普通	内外面口縁ナデ、体部外面ハケ目の後削り、体部内面カキ目	



第7図 遺構出土遺物

S K 38

概要 (第2図、写真図版10下) 8 A22グリッドに位置する。III a層上面からの掘り込み。径約60cm、深さ約30cmの小土坑。

遺物 (写真図版22下の190、写真図版24の191) 箸状の木製品と漆塗りの椀が出土している。箸状木製品は全長約14cmで、端部から1/4ほどのところで折れ曲がっている。漆椀は比較的薄手の作りで、底部からの立ち上がりはかなり急である。底部の縁辺には幅2mm程度の浅い凹線が円形にめぐっている。漆の皮膜はもろく、かなり剥落が著しい。

P 23

概要 (第2図) 2 D12グリッドに位置する。II a層からの掘り込み。直径50cm、深さ30cm程度の大形のピットである。

遺物 (第7図46・48) 土師器甕・坏・椀(黒色土器)、須恵器壺・坏が出土している。図示したのは46が須恵器無台坏、48は土師器長胴甕の口縁部付近である。

3 その他の遺物

ここでは、包含層出土の遺物について時代順に述べる。

(1) 弥生時代

弥生時代の遺物はほとんどがA地区包含層(VII層)からの出土である。

土器(第8図、第9図68~74、第10図78・79)

弥生土器の出土量は平箱(60cm×40cm×15cm)にして10箱を数えるが、復元不可能な破片が多く、器形が推定できる資料は数点にすぎない。主として文様の特徴から以下の4群に大別できる。

第1群(第8図49、第9図68~70) 北陸地方の小松式(弥生時代中期)に類似する土器。櫛状工具の先端による櫛描文を主体とするもの。平行横線(49)口縁内部への工具押しつけによる綾杉文など(68、69)、頸部周囲に貼付けた粘土帯への縦横の刻み(70)が特徴である。

第2群(第8図50・51) 新潟県の山草荷式土器(弥生時代中期)に類似する土器。半分に割った竹管(半截竹管)のような工具で、平行な沈線を描くもの。連弧文(50)、平行沈線と縄文を持つもの(51)がある。

第3群(第8図52~62) 東北地方南部の天王山式(弥生時代後期初頭)に類似する土器。縄文、沈線を多く用いたさまざまな形の区画文を主体とするもの。沈線による菱形区画(52)、連弧文や鋸歯文(53~56、58)、棒状工具による上下からの交互刺突(57)などが特徴である。

第4群(第8図63~67、第9図71~74、第10図78・79) その他の土器群。沈線による鋸歯状文や格子文(63)、連弧文(64)、粘土紐貼付けによる波状文(65)、指頭による横方向への連続圧痕(66・67)、ハケ・削りのみで文様のみられないもの(71~74、78・79)がある。

図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種	遺存	法量など(長さ:cm、重さ:g)				胎土			成形・調整など	備考
						口径	器高	底径	その他	混入物・粒子等	色調	焼成		
49	3 B21	Ⅶ	弥生土器	甕	体部1/8					径1mm以下の長石(多)	浅黄橙	堅		小松式
50	4 C 3	Ⅶ	弥生土器	壺	体部小片					径1mm前後の小礫多(長石など)	にぶい黄橙	やや軟		山草荷式 外面赤彩
51	4 C23	Ⅶ	弥生土器	甕	小片					長石、石英の微粒子	暗褐	堅	沈線で区画後縄文	山草荷式 わずかに赤彩残る
52	4 B17	Ⅶ	弥生土器	甕	体部1/12					径1mm以下の長石(多)	にぶい黄橙	堅		天王山式 外面の一部に2次焼成
53	3 C 1 4 B10	Ⅶ	弥生土器	甕	口縁1/8					径1~2mmの長石	にぶい黄橙	堅		天王山式
54	4 C17	Ⅶ	弥生土器	甕	口縁1/12					径1mm以下の長石	浅黄	堅		天王山式 外面にスス
55	4 B17 4 B18	Ⅶ	弥生土器	甕	口縁1/8					径1mm以下の長石(多)	浅黄	堅		天王山式 外面にスス
56	4 B10 4 B20	Ⅶ(4 B10) Ⅷ(4 B20)	弥生土器	甕	口縁1/8					径1mm以下~2mmの長石	にぶい黄橙	堅		天王山式
57	3 C 8	Ⅶ	弥生土器	甕	口縁1/16					径1mm以下~3mmの長石	浅黄橙	堅		天王山式
58	3 B 4	Ⅶ	弥生土器	甕	口縁1/4					粒子粗、長石大粒を含む	黄橙	堅		天王山式
59	4 B15	Ⅳ	弥生土器	甕	体部1/12					径1mm以下~2mmの長石	にぶい黄橙	やや軟		天王山式 内外面にスス
60	3 C12 3 C13	Ⅶ	弥生土器	甕	口縁・頸部1/2					径1~2mmの長石	灰黄褐	堅		天王山式 No61・62と同一個体
61	3 C12 3 C13	Ⅶ	弥生土器	甕	体部小片					径1~2mmの長石	灰黄褐	堅		天王山式 No60・62と同一個体
62	3 C12 3 C13	Ⅶ	弥生土器	甕	頸部1/8					径1~2mmの長石	灰黄褐	堅		天王山式 No60・61と同一個体
63	3 C22	Ⅶ	弥生土器	壺	頸部1/8					径1~5mmの長石	にぶい黄褐	やや軟		天王山式
64	4C2、4C8 4 C 7	Ⅶ	弥生土器	甕	体部1/6					径1mm以下の長石(多)	浅黄橙	やや軟		天王山式
65	4 C12 4 C17	Ⅶ	弥生土器	甕	口縁1/16					粒子やや粗、長石、石英、海綿骨針	にぶい黄	堅		天王山式 全体外面及び口縁部内面に炭化物付着
66	2 B17	Ⅶ	弥生土器	甕	口縁1/16					粒子粗、径1~2mmの長石・石英(多)	にぶい橙	堅		天王山式 口縁部に炭化物付着
67	3 A20 3 A25	Ⅶ	弥生土器	甕	口縁1/4	10.9				粒子粗、径1~2mmの長石・石英(多)	にぶい黄橙	堅		天王山式 外面に炭化物付着

土製品

土器の破片を転用した土製円盤(第10図80~83)がある。文様からみるともともと80は小松式、83は山草荷式だったと考えられる。

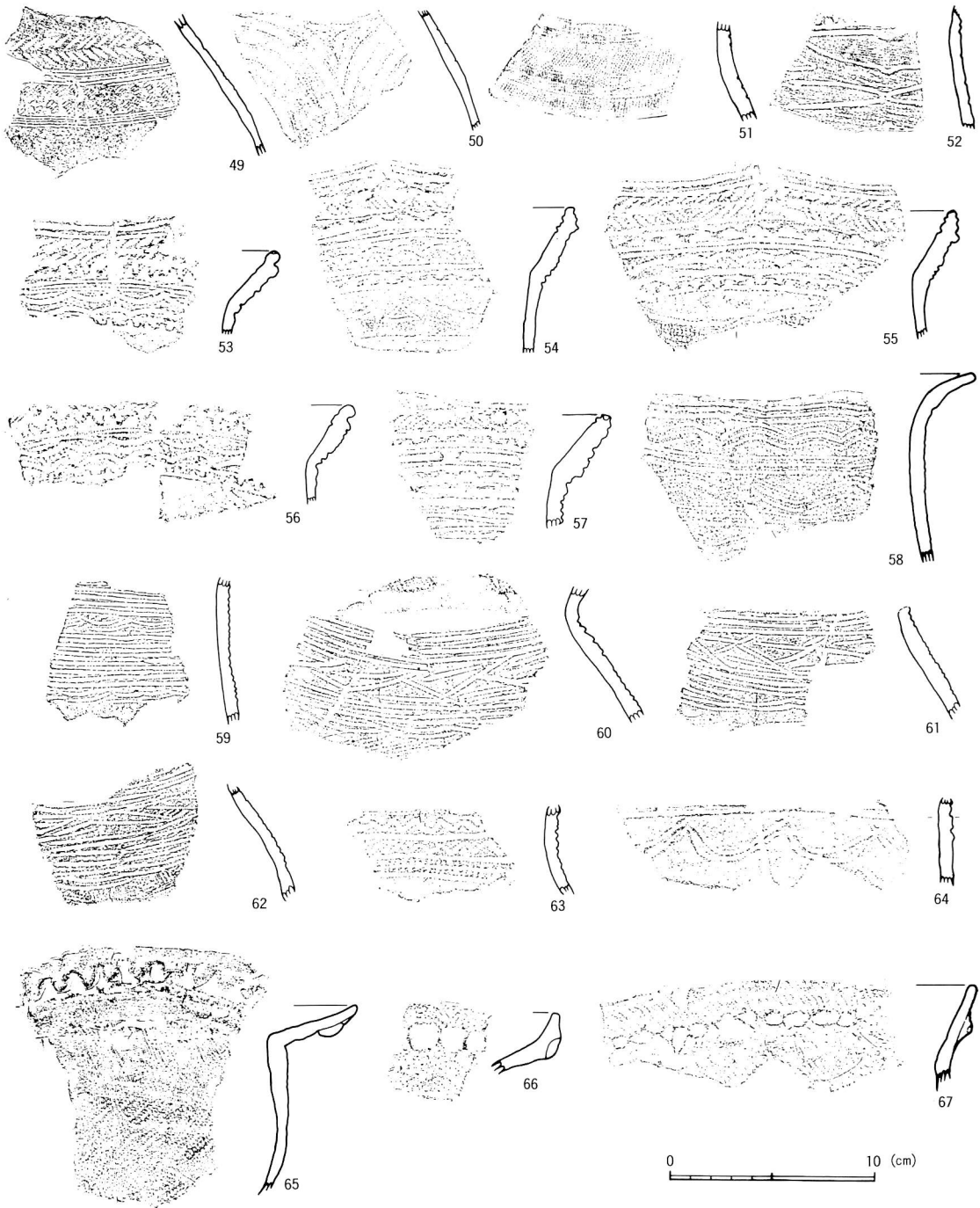
石器(写真図版23上の154~186、写真図版23下の187)

石器類は3 B、3 C、4 B、4 C、5 A、5 Bの各グリッドのⅦ層を中心に出土している。

石鎌(154~185) 154~177は有茎、178~185は無茎。石材は頁岩が最も多い。

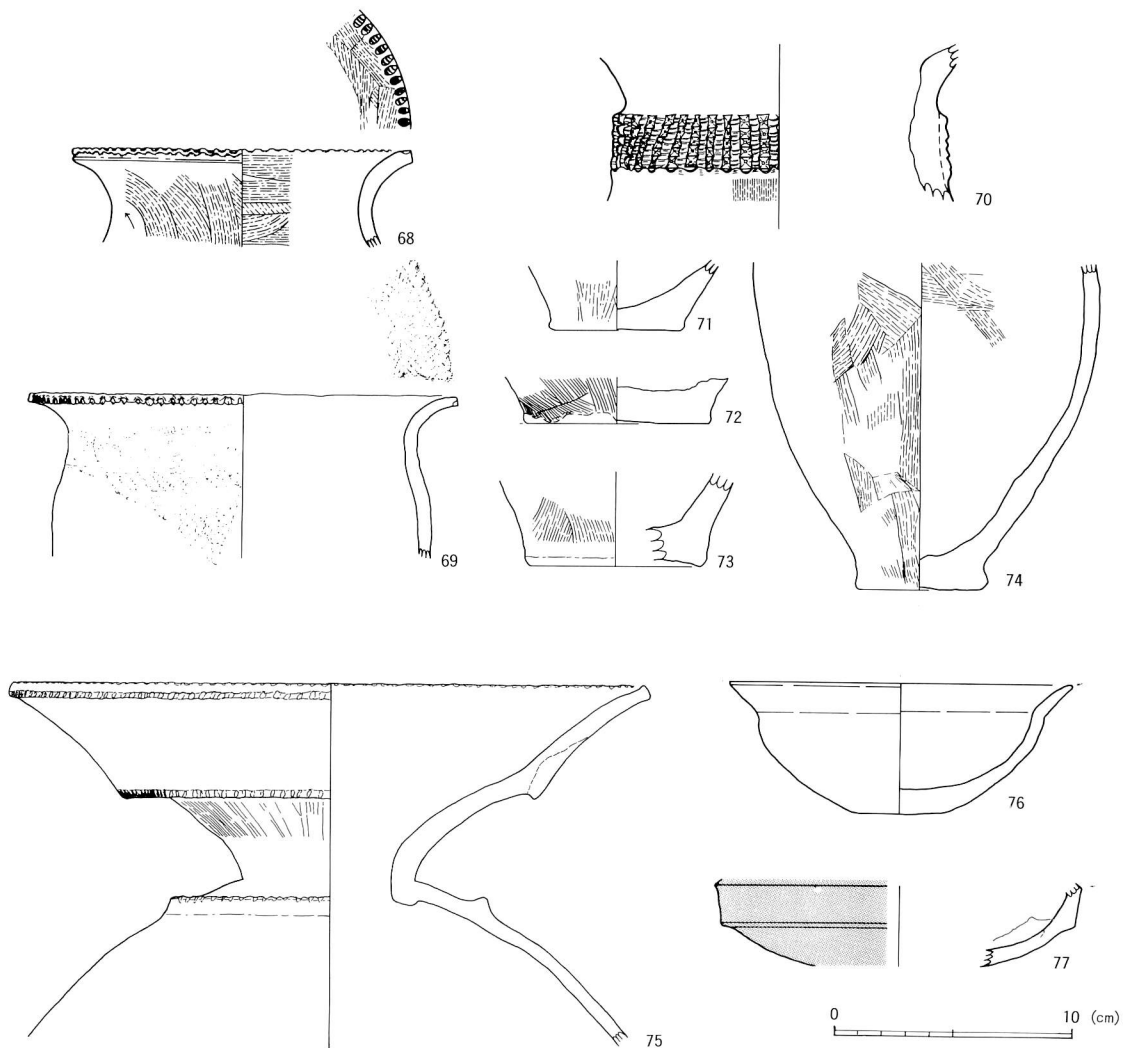
石錐(186) 錐部の先端がわずかに折損している。

石核(187) 頁岩製の石核。3 B24グリッドのⅦ層から出土した。全体のプロポーシオンは打面を上にした船底形を呈する。残存部の多さからみて、剥片の剝離はまだそれほど進んでいないように見受けられる。



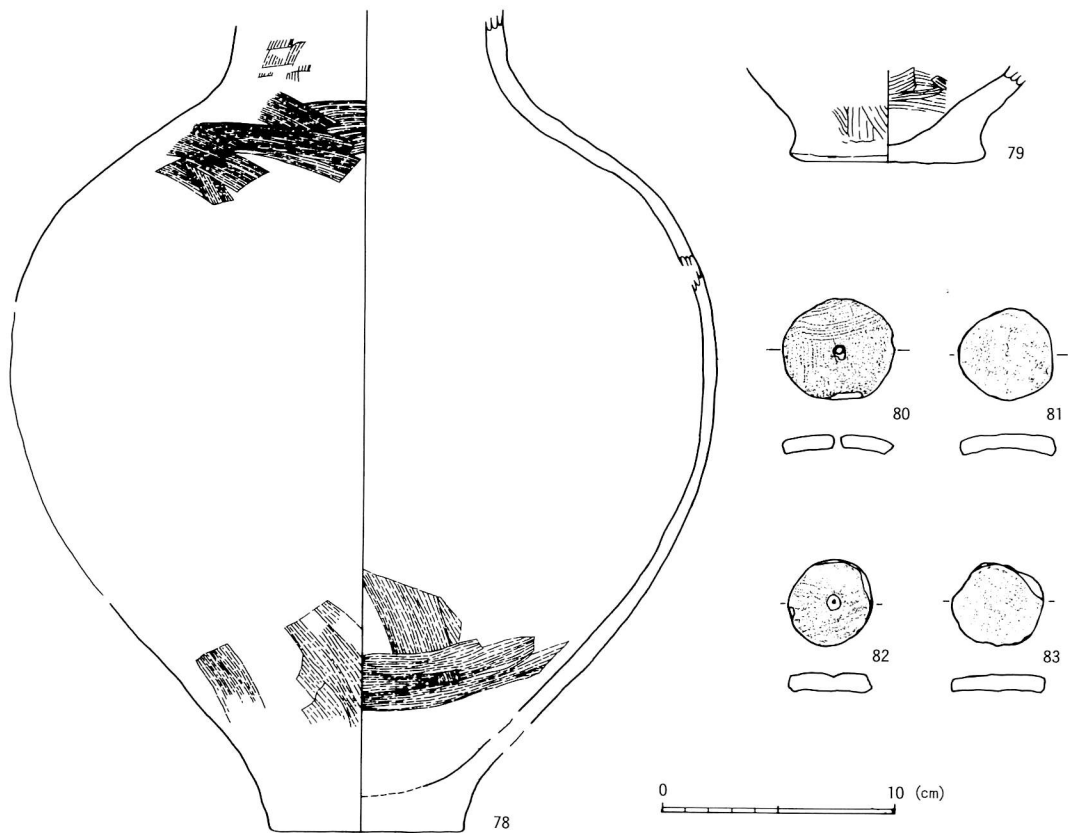
第 8 图 包含層出土遺物 (A 地区)

図版No.	出土遺構地	出土層位	種別	器種など	遺存	法量など(長さ:cm、重さ:g)				胎土			成形・調整など	備考
						口径	器高	底径	その他	混入物・粒子等	色調	焼成		
68	4 B 25	VII	弥生土器	甕	口縁(一部欠損)	14.4				径1~2mmの長石	にぶい黄褐	普通		
69	3 B 13	VII	弥生土器	甕	口縁1/4	18.2				径1mm以下の石英	黄褐	普通		小松式、外面に炭化物付着
70	5 B 1	VII	弥生土器	壺カ	頸部1/2			頸径14.4	径5mm前後の小礫(多)	にぶい橙	普通			小松式
71	4 B 1	VII	弥生土器	甕カ壺	底部のみ			5.5	海綿骨針、径1~3mmの石英	黄橙	堅	内外面ミガキ、外面ハケ目		小松式
72	4 C 17	VII	弥生土器	甕カ壺	底部1/3			7.8	径1~2mmの長石(多)	灰白	普通			小松式
73	4 A 10	VII	弥生土器	甕カ壺	底部1/3			7.4	径1~2mmの長石(多)	灰白	普通			小松式
74	3 B 21	VII	弥生土器	甕カ壺				5.3	径1mm以下1~3mmの長石(多)	黄褐	堅	内外面ハケ目		小松式、内外面に炭化物付着
75	3 B 25 4 B 5、5 B 5	ガツボ(3B25) VII層(4B5) III層(5B5)	土師器	壺	口縁部・頸部	26.8			粒子密、径1~7mmの長石、石英	にぶい黄橙	普通	内外面ヘラミガキ		古墳時代前期初頭
76	2 C 21	IX	土師器	鉢	口縁1/2が欠損	14.5	5.6	3.5	海綿骨針	灰骨褐	普通	内外面ミガキ		
77	3 B 21	VII	土師器	細頸壺	体部小片					にぶい橙	普通	外面ミガキ		外面赤彩



第9図 包含層出土遺物(A地区) ※アミ点は赤彩を示す。

図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種	遺存	法量など(長さ:cm、重さ:g)				胎土			成形・調整など	備考
						口径	器高	底径	その他	混入物・粒子等	色調	焼成		
78	3 C 7	Ⅶ	弥生土器	壺	2/3	11.7	(35.6)	8.5		粒子粗、径1~3mmの長石、石英(多)	にぶい黄	堅	全体にハケ目(内面上部を除く)	内外面に被熱
79	4 C 7	Ⅶ	弥生土器	甕	底部のみ			8.4		径1~4mmの雲母、石英	黄褐	軟	内外面にハケ目	小松式
80	3 C 17	Ⅶ	土製品	紡錘車?	完形				径4.8 厚0.6 重量14.6	径5mmの小礫(少)	灰黄褐	堅		小松式壺体部破片を転用
81	4 C 7	Ⅶ	土製品	土製円盤	完形				径4.0 厚0.6 重量12.9	径5mmの小礫(少)	灰褐	普通		弥生土器壺体部破片を転用
82	4 C 23	Ⅶ	土製品	土製円盤	完形				径3.6 厚0.7 重量12.8	砂粒(多)	黄灰	普通		山草荷式壺体部破片を転用 外面赤彩
83	5 B 1	Ⅶ	土製品	土製円盤	完形				径4.0 厚0.7 重量12.0	砂粒(少)	灰黄	普通		弥生土器壺体部破片を転用
84	2 D 12	Ⅱ a	須恵器	蓋	3/4		3.2		径16.0	長石	青灰	堅		
85	2 D 17	Ⅱ a	須恵器	蓋	完形		(2.4)		径13.4	径1mm程度の凝灰岩粒(多)	淡灰	堅	天井部ヘラ削り	
86	2 C 14	Ⅱ b	須恵器	蓋	完形		2.4		径11.3	粒子密、径1mm以下の凝灰岩粒(少)	灰	堅	天井部ヘラ削り	つまみ上部摩滅
87	5 B 5	Ⅲ	須恵器	蓋	完形		2.7		径14.4	径1~3mmの石英	灰	堅	表面全体に自然釉	
88	3 C 13	ガツボ	須恵器	蓋	1/2		4.5		径12.6	径2~5mmの小礫(多)	灰	堅	天井部ヘラ削り	
89	3 C 19	ガツボ	須恵器	蓋	1/3		3.2		径12.4	径1mm以下の石英、雲母(多)	灰	堅		
90	2 D 8	Ⅱ a	須恵器	無台坏	1/5	11.8	3.1	8.0		径1~2mmの長石	青灰	普通	底部回転ヘラ削り	
91	2 D 11	Ⅱ a	須恵器	無台坏	口縁・底部に一部欠損	12.3	3.0	8.0		細かい長石	灰白	普通	底部回転ヘラ削り	
92	2 D 12	Ⅱ a	須恵器	無台坏	4/5	12.8	3.6	7.2		径1~5mmの長石、凝灰岩粒(多)	灰	普通	底部回転ヘラ削り	
93	2 D 12	Ⅱ a	須恵器	無台坏	2/5	12.2	3.6	7.0		径1~2mmの長石	灰	堅	底部回転ヘラ削り及びナデ	
94	2 D 17	Ⅱ a	須恵器	無台坏	1/2	11.6	3.0	7.0		径1mm以下の長石	青灰	普通	底部回転ヘラ削り及びナデ	
95	2 D 17	Ⅱ a	須恵器	無台坏	1/6	12.6	3.4	6.6		石英(多)	灰白	軟	外面被熱による器面の剥落	外面の遺存状態悪い
96	2 D 17	Ⅱ a	須恵器	無台坏	一部欠損	11.9	3.1	7.6		細かい長石	灰	普通	底部回転ヘラ削り及びナデ	
97	2 D 18	Ⅱ a	須恵器	無台坏	1/4	10.4	3.1	7.6		長石	緑灰	普通	底部回転ヘラ削り	
98	2 D 17	Ⅱ a	須恵器	無台坏	口縁4/5欠損	12.5	3.7	7.1		径1~2mmの長石	灰	普通	底部回転ヘラ削り及びナデ	
99	3 D 7	Ⅱ a	須恵器	無台坏	1/2	12.6	3.5	8.0		細かい長石	淡灰	普通	底部回転ヘラ削り及びナデ	
100	2 C	Ⅲ	須恵器	無台坏	1/2	11.8	3.0	8.2		細かい長石	灰	普通	底部回転ヘラ削り及びナデ	
101	2 D 6	Ⅲ	須恵器	無台坏	口縁一部欠損	12.0	3.0	8.8		径1~2mmの長石、凝灰岩粒	青灰	堅	底部回転ヘラ削り	
102	3 C	Ⅲ	須恵器	無台坏	1/2	12.1	3.0	7.0		径1mm以下の凝灰岩粒	灰	普通	底部回転ヘラ削り	
103	4 C 19	Ⅲ	須恵器	無台坏	口縁1/6 底部完存	11.2	3.1	6.9		白色粒子	灰色	普通	底部回転ヘラ削り	
104	2D9、2D14 2 D22	9、2 D14 Ⅱ b (2D22)	須恵器	椀カ	底部2/3				台径8.0	径1~2mmの長石	淡灰	軟	ロクロナデ	
105	2 D 17	Ⅱ a	須恵器	有台坏	1/6	10.4	5.3		台径6.8	径1mm以下の長石	灰	堅	底部回転ヘラ削り	ゆがみ大
106	4 B 25	Ⅲ	須恵器	壺	底部1/4			13.6		石英	灰	堅		
107	3 C 17	Ⅳ	須恵器	甕	1/4	27.2				径5~7mmの小礫(多)	灰	堅	内外面タタキ	



第10図 包含層出土遺物（A地区）

(2) 古墳時代

土師器（第9図75～77、第12図108・109）

古墳時代の土師器は平箱（60cm×40cm×15cm）にして5箱を数える。うち4箱分のほとんどがA地区の包含層（Ⅶ層）から出土したものである。

壺（75） 有段口縁を持つもので、肩部付近まで遺存している。棒状工具を押圧してつけた刻み状の装飾が口唇部と段、そして肩部の突帯部分に施されている。ほかの部分は非常に入念なヘラミガキによる調整がなされている。古墳時代前期初頭の北陸系の土師器と考えられる。

鉢（76） 口縁部を除くとほぼ完形で出土した。内外面とも入念なミガキが施される。

細頸壺（77） 体部のみ残存しているが、台付きの細頸壺と考えられる。体部周囲に幅広の突帯がめぐり、外面全体が赤彩されている。

有孔土器（108） 底部しか残っておらず、元の器形が明らかでないが、底部に孔を持つ鉢ではないかと考えられる。

器台（109） 受部の一部だけが残る。古墳時代前期のものと考えられる。

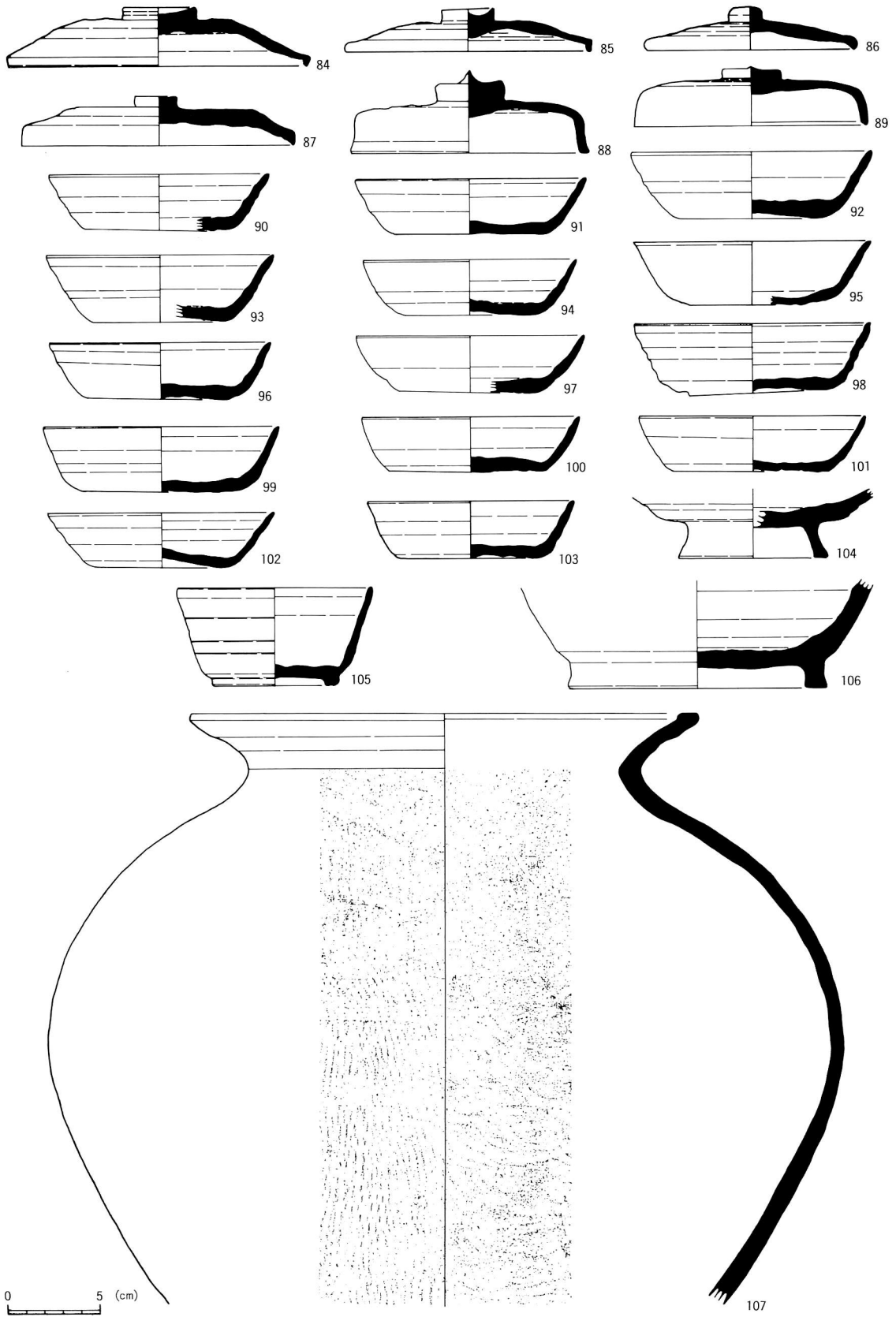
石製品（写真図版23上の151・153）

管玉（151） 3 B 11グリッドⅦ層からの出土。碧玉製。孔は両端から穿孔している。

勾玉（153） 4 C 22グリッドⅦ層からの出土。水滴形を呈し、ヒスイ製らしい。

土製品（写真図版22下の146・147）

ふいごの羽口と考えられる土製品が2点出土している。



第11图 包含層出土遺物 (B地区)

図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種など	遺存	法量など(長さ:cm、重さ:g)				胎土			材質など	成形調整など	備考
						口径	器高	底径	その他	混入物・粒子等	色調	焼成			
108	4 C 22	Ⅶ	土師器	有孔鉢	底部小片			1.7		長石	にぶい黄橙	堅			
109	4 C 7	Ⅶ	土師器	器台	1/4	6.2	(1.9)	4.6		金雲母、長石	灰褐	堅			
110	5 D 3	Ⅲ	土師器	小壺	口縁のみ5/6欠損	10.5	9.1	4.9		径1~2mmの長石、石英	にぶい橙	普通		ロクロ	口縁から体部にかけて炭化物附着
111	2 C、2 D	排土	土師器	小壺	体部・底1/6		4.8	6.8		径1mm程度の小礫、長石(多)	外面にぶい赤褐、内面にぶい黄褐	普通		底部に回転糸切り痕	外面に被熱
112	4 B 25	Ⅲ	土師器	甕	底部のみ			8.9		石英、雲母(多)	黄褐	やや堅			底部に木炭痕
113	2 D 7	Ⅶ	土師器	長胴壺	口縁1/6	21.6				長石、石英	にぶい橙	堅			
114	5 D 3	Ⅱc	土師器	長胴壺	口縁1/5	21.0				径1~2mmの長石	明黄褐	軟		ロクロナデ外面一部ハゲ	
115	5 C 17	Ⅱa	土師器	鍋	1/2	20.4	9.9	7.6		径1~3mmの石英	浅黄橙	堅		ロクロ成形外面上部ハゲ目及びナデ外面下部ロクロ削り及びナデ	鉄鉢の模造品カ
116	3 D 1	Ⅱa	土製品	土鍾	両端欠損				全長(3.4) 最大径1.1 孔径0.2 重量3.0		灰白(一部黒色)	普通			
117	3 D 7	Ⅱa	土製品	土鍾	両端磨減				全長(3.6) 最大径1.2 孔径0.4 重量3.6	砂粒	灰白(一部黒色)	軟			
118	3 D 17	Ⅱa	土製品	土鍾	一端欠損 一端磨減				全長(3.9) 最大径1.0 孔径0.3 重量2.7		明褐灰	やや軟			
119	2 D 8	Ⅱa	土製品	土鍾	中心部一部欠損				全長3.6 最大径0.9 孔径0.3 重量2.0	径1mmの小礫	明褐灰	やや軟			
120	3 D 4	Ⅱa	土製品	土鍾	両端欠損				全長(3.6) 最大径1.2 孔径0.4 重量3.6		明褐灰	やや軟			
121	3 D 14	Ⅱa	土製品	土鍾	2/3欠損				全長(2.7) 最大径1.3 孔径0.5 重量2.7	小礫	明褐灰	やや軟			
122	2 D 17	Ⅱa	土製品	土鍾	1/2欠損				全長(2.4) 最大径1.1 孔径0.3 重量2.3	小礫	灰白	やや軟			
123	3 C 5	Ⅱb	土製品	土鍾	1/2欠損				全長(2.8) 最大径0.9 孔径0.3 重量1.4	小礫	灰白	軟			
124	4 D 2	Ⅱa	土製品	土鍾	両端欠損				全長(3.5) 最大径1.2 孔径0.5 重量4.6		赤褐	堅			
125	4 D 2	Ⅱa	土製品	土鍾	両端欠損				全長(3.4) 最大径0.9 孔径0.3 重量2.3	小礫	明褐	やや軟			
126	3 D 14	Ⅱa	土製品	土鍾	両端磨減				全長(4.3) 最大径1.2 孔径0.3 重量4.4	小礫	灰白	軟			
127	2 D 22	Ⅱb	土製品	土鍾	中心部一部欠損 一端小欠損				全長(5.5) 最大径1.2 孔径0.4 重量5.6		灰白(一部黒色)	普通			
128	3 D 1	Ⅱb	土製品	土鍾	両端小欠損				全長(3.7) 最大径1.1 孔径0.3 重量2.8		灰白(一部灰)	やや軟			
129	2 C 25	Ⅱc	土製品	土鍾	両端欠損				全長(4.3) 最大径1.3 孔径0.6 重量5.0	小礫	灰白(一部明褐)	やや軟			
130	2 D	Ⅱc	石製品	紡錘車?	完形				全長7.9 幅7.2 厚2.7 孔径0.8 重量128.3	-	-	-	堆積岩(泥岩カ)		軸穴貫通せず未製品カ
131	2 D 18	Ⅱc	土師器	甕	口縁1/5					径2mm前後に長石	にぶい橙	やや軟			
132	8 B 9	Ⅱa	土師器	長胴壺	完形	21.6	36.1		体部径22.2	粒子粗 粗砂(多)	浅黄橙	やや軟		上半部ロクロ成形 下半部タキ	外面全体にスス附着

(3) 平安時代

石動遺跡の平安時代の遺構・遺物は、ほとんどがB地区に集中している。ここに図示した須恵器・土師器も、B地区のⅡa層及びⅢa層から出土したものが中心である。

須恵器(第11図)

蓋(84~89) 84~87は坏蓋、88・89は壺の蓋であろう。86のつまみ部上部が、焼成後に摩滅しているのが注目される。

無台坏(90~103) いずれもロクロナデにより成形され、底部は回転ヘラ切りされている。

有台坏(104・105) 成形については無台坏と同様である。104は高台が大きく、坏というより稜碗の範囲に含めるべきものかもしれない。

壺 (106) 底部しか残っていないが、高台付の壺と考えられる。

甕 (107) 底部のみ欠損している。外面にタタキ、内面に当て具痕が青海波状に残っている。

土師器 (第12図110~115・131・132)

小甕 (110・111) 器壁が比較的薄い小甕である。いずれもロクロにより成形されている。

甕 (112) 底部のみ残存。内外面とも軽いハケ目。

長胴甕 (113・114・131・132) 114は外面にロクロナデ痕、内面にハケ目がみられる。132は外面上部はロクロナデだが、下部はタタキ痕、内面底部付近には当て具痕がみられる。

鍋 (115) 口縁部がかなり強く内側へ屈曲し、底部は平らである。外面の調整はロクロナデが中心となる。鉄製の鉢を模したものか。

土製品

土錘 (116~129) いずれも細形の土錘である。

石製品

紡錘車 (130) 平安時代のものかは不明だが、一応ここに載せておく。周囲を研磨して成形し、両面から穿孔した形跡があるが、貫通はしていない。未製品であろう。

砥石 (写真図版22下の148) 緻密な粒子の堆積岩製の砥石である。周囲の4面を全て研磨面として使用しているほか、深い条痕も各所にみられる。

墨書土器 (第13図133~138)

本来は須恵器であるが、特異な遺物なので一項をたてておく。いずれも有台・無台の坏の底部に残された墨書である。線にシャープさがなく、先端がまとまらない比較的太めの筆記具で書かれた文字という印象が強い。

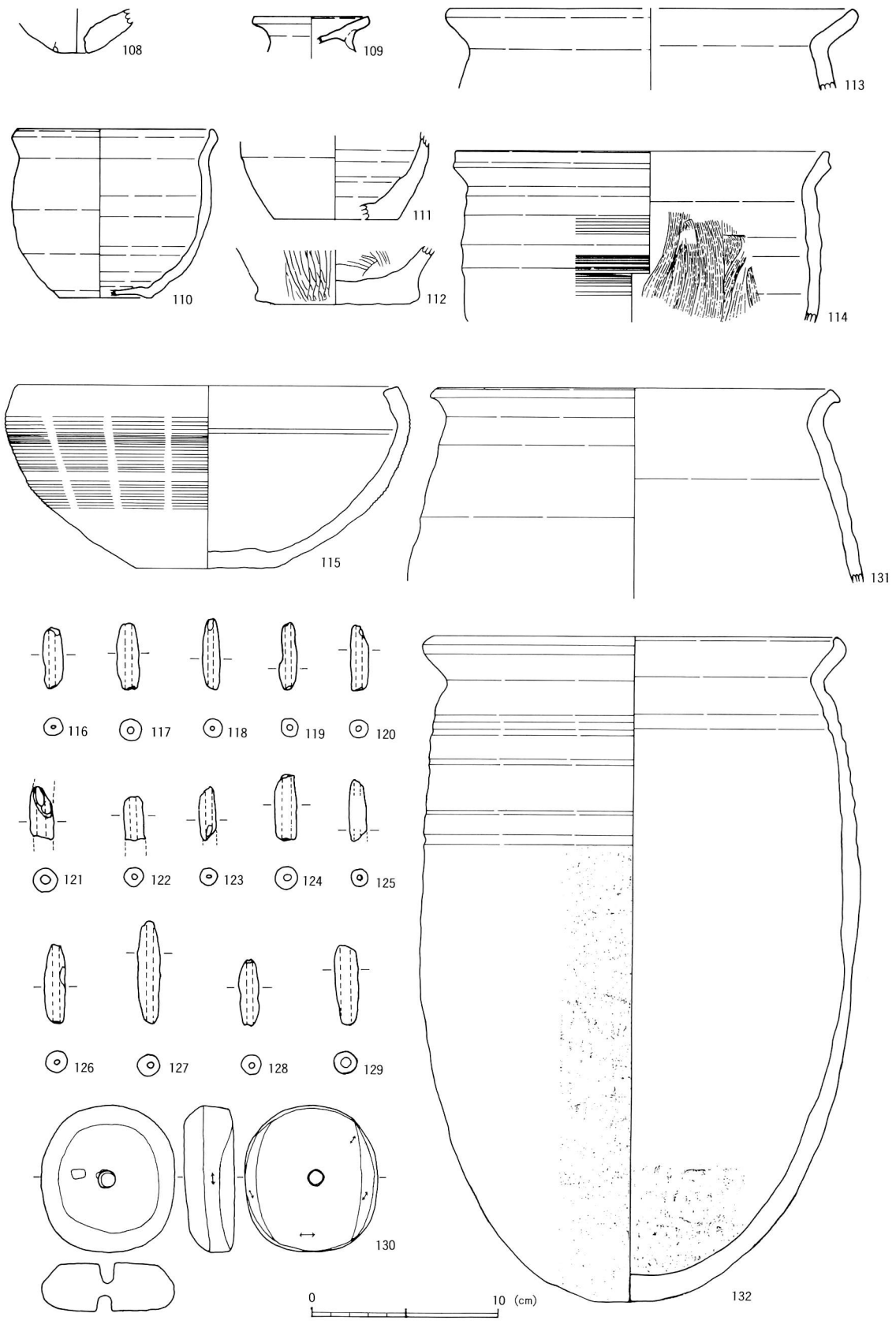
(4) 中世

包含層出土の中世遺物のごくわずかである。

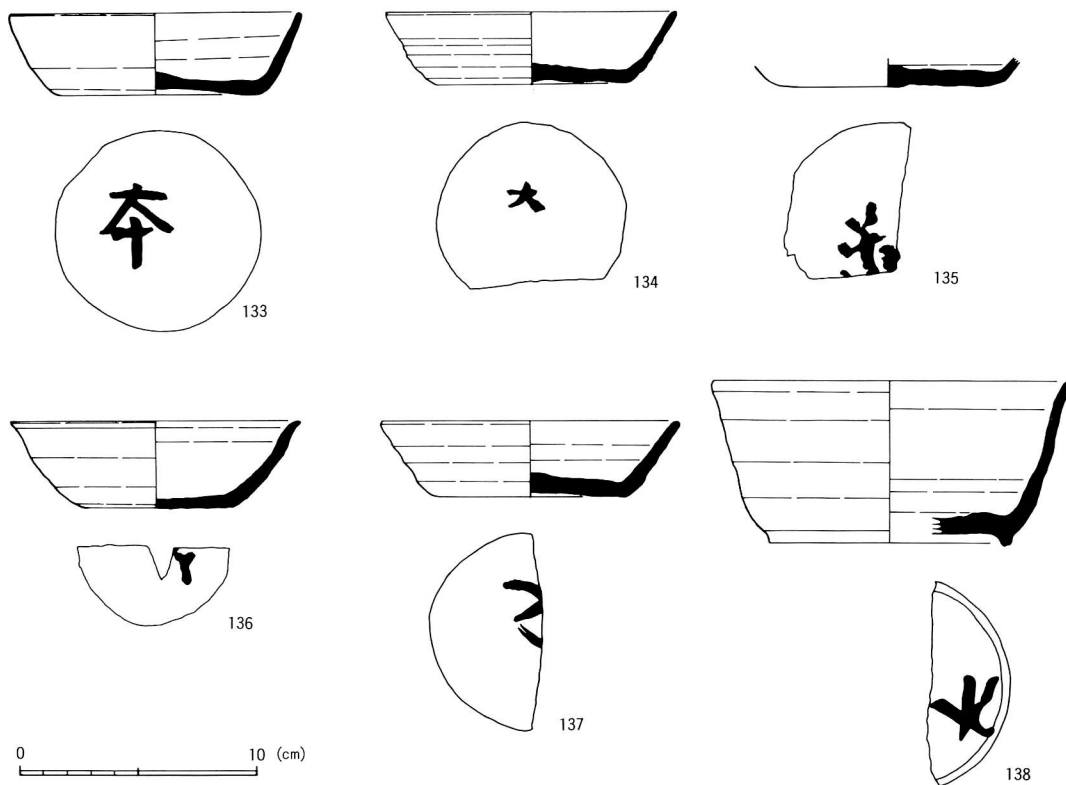
珠洲焼 (第14図) いずれも甕の体部破片であろう。外面に平行タタキ痕、内面には当て具痕が観察される。

漆碗 (写真図版24の149・150) 149は朱漆で文様を描いている。木胎は3mm程度ときわめて薄く、ロクロ引きと推定される。黒漆の皮膜も厚く、重ね塗り等かなり高度な技法を用いて塗布したものと考えられる。150は対称的に分厚い木胎で、漆の皮膜も剥落が進み、下地に柿渋などを用いた比較的粗悪な品のようなものである。

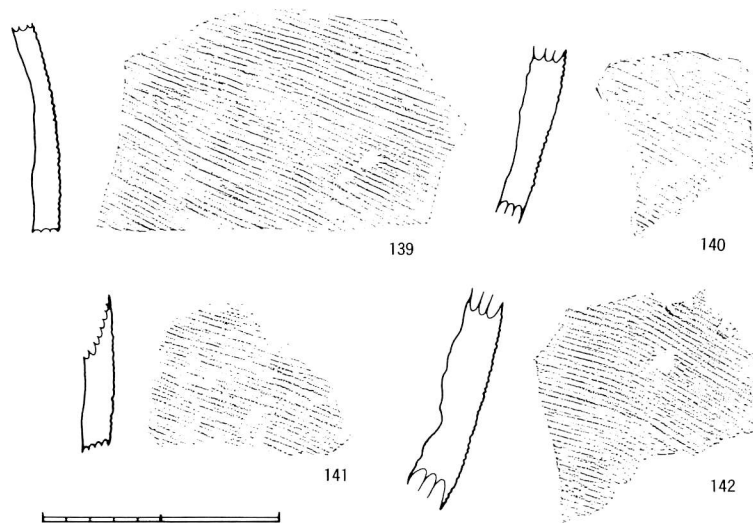
図版No.	出土遺構地	出土層位	種別	器種など	遺存	法量など (長さ:cm、重さ:g)				胎土			成形・調整など	備考
						口径	器高	底径	その他	混入物・粒子等	色調	焼成		
133	3 B 10	Ⅶ	須恵器	無台下	底部1/3			9.0		細かい長石	淡灰	普通	底部回転ヘラ切り	墨書土器 (底部内面)
134	不明	Ⅱ a	須恵器	無台坏	1/3	(12.2)	3.7	5.8		径1mm以下の石英 (多)	青灰	堅	底部回転糸切り	墨書土器 (底部外面)
135	5 D 3	Ⅱ c	須恵器	無台坏	1/2	12.6	3.2	8.3		径1mm前後の白色粒子	灰白	やや軟	回転ヘラ切り	墨書土器 (底部外面)
136	2 C 5	Ⅲ	須恵器	有台坏	3/5	15.0	7.0			径1mm前後の長石	緑灰	普通	底部回転ヘラ切り	墨書土器 (底部外面)
137	S D 6	1	須恵器	無台坏	一部欠損	12.3	3.4	10.0		径1mm以下の長石	灰	やや軟	底部回転ヘラ切り	墨書土器 (底部外面)
138	S D 6	1	須恵器	無台坏	一部欠損	12.4	3.1	8.2		密、細かい長石 (多)、細かい石	灰	堅	底部回転ヘラ切り	墨書土器 (底部外面)
139	5 C 21	ガツボ	珠洲焼	甕	体部小片					径1mm以下の長石 (多)	灰	堅		
140	6 B 25	ガツボ	珠洲焼	甕	体部小片					海綿骨針、径1mm以下の長石	灰	堅		
141	6 C 1	Ⅱ a	珠洲焼	甕	体部小片					径1mm以下の長石	灰	軟		
142	6 C 1	ガツボ	珠洲焼	甕	体部小片					海綿骨針、径1mm以下の長石	灰	堅	平行タタキ	



第12図 包含層出土遺物（B地区）



第13図 墨書土器



第14図 包含層出土遺物 (B地区)

Ⅳ ま と め

1 遺跡の形成について

石動遺跡は、新砂丘Ⅱ-2列をベースとし、そこにまず弥生時代中期から古墳時代前期まで集落が営まれた後、平安時代中頃まで人間の居住した痕跡がなくなる。これは、自然堤防形成の原因となった阿賀野川の氾濫に起因するものと考えられる。今回調査した範囲では、砂丘地と自然堤防の端部が合わさる付近に谷状の地形が形成され、そこには一定期間流水があり小河川となっていたと推定されるが、ある時期から水量が減り、マコモ等が繁茂する沼地と化し、現在は埋没してガツボとなったものと考えられる。自然堤防上には平安時代中期から小規模な集落が営まれ始めたようだが、たびたび河川の氾濫に襲われたためか、厚い粘土やシルトに覆われているにも関わらず、上層と下層では遺物の時期にほとんど開きがない。その後、14世紀ころまでには砂丘も自然堤防も完全に埋没して平地化し、そこにわずかながら中世の遺構が存在している。

2 各時代の概要について

(1) 弥生時代

弥生時代の遺物は土器、石器、土製品がある。土器は中期中葉の山草荷式と小松式、後期初頭の天王山式が主だが、少量ながら栗林式など中部地方のものも認められる。いずれも包含層一括での出土である。一遺跡にこれだけ多様な土器が入り込んでいることは今後の検討を要する。

(2) 古墳時代

相対的に出土量は多くないが、遺構に伴う良好な資料が検出されている。A地区SD1、SD4はその平面形に企画性を持った溝状遺構であり、特にSD4は聖籠町二本松東山遺跡で検出された古墳時代前期の周溝墓との類似性が注目される。その他の遺構では、A地区SK14が管玉を有していたことから、土坑墓の一種ではないかと考えられる。今回調査した範囲は、当時の集落の縁辺部で、埋葬に関連した遺構が目立つことから、一種の墓域であったと推定される。

(3) 平安時代

調査区の東側、自然堤防の上に集中して平安時代の遺構・遺物がみられた。包含層は全部で3層、遺構面は2面を数えたが、いずれも時期的に大きな幅はなく、おおむね8世紀後半の枠内で収まるものばかりだった。

(4) 中世

ガツボ中や7A・8Aを中心とした範囲のⅡa層上面から、珠洲焼甕などの破片がわずかに出土している。B地区SK1から出土した青磁碗破片は14世紀のものと考えられるが、残存部分が少なく、詳細な時期比定は難しい。

図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種	遺存	胎土			成形・調整など	備考
						混入物・粒子等	色調	焼成		
143	SK 1(B地区)	1	青磁	碗	体部の一部	粒子細かい	釉：青緑色 体：灰白色	普通	連弁文	
144	SK 1(B地区)	1	珠洲焼	すり鉢	口縁部の一部	微細な凝灰岩粒多い	灰	普通	内外面クロコナデ	
145	SK 1(B地区)	1	珠洲焼	すり鉢	口縁部の一部	微細な凝灰岩粒多い	灰	普通	内外面クロコナデ	
146	4 B 5・5 B 3	Ⅶ	土製品	羽口	先端部の1/3	微細な凝灰岩粒(少)	灰黄	普通		先端部溶融
147	4 B 23	Ⅶ	土製品	羽口	中央部の1/2	微細な凝灰岩粒(少)	灰黄	普通		

図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種	遺存	大きさ	材質など	備考
148	2 D 11	Ⅱ a	石製品	砥石	完形	長9.6 幅3.7 厚3.7	泥岩	

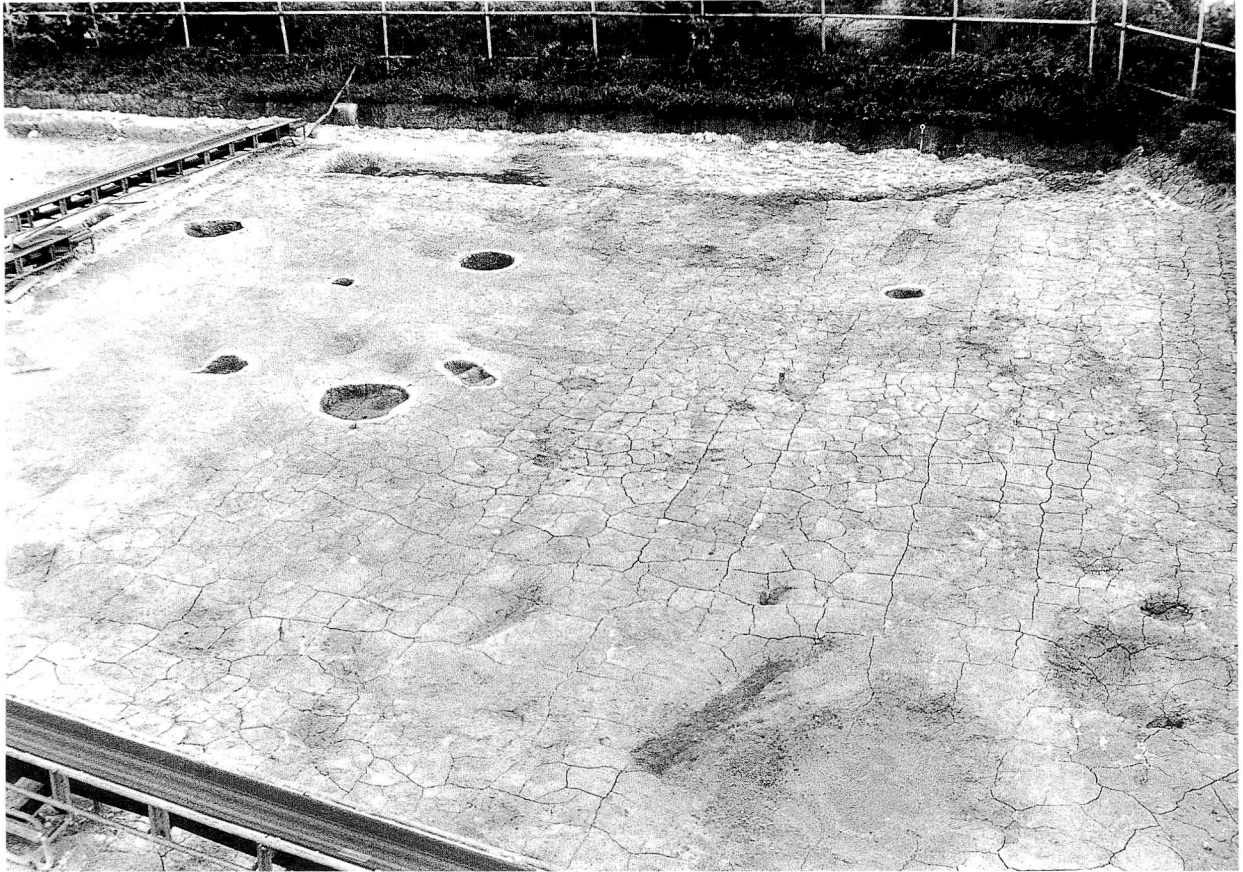
図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種	遺存	法量など(長さ:cm、重さ:g)				成形・調整など	備考
						口径	器高	底径	その他		
149	6 D 24	ガツボ	漆器	碗	細片					ロクロ挽き	
150	4 D 18	Ⅲ a	漆器	碗カ	口唇部欠損	(8.9)	(2.4)	7.8		ロクロ挽き	横木取り近世か?

図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種	遺存	大きさなど	材質など	備考
151	3 B 11	Ⅶ	石製品	管玉		長2.5 径0.9 孔径0.2 重3.5	碧玉	
152	SK14(A地区)	7	石製品	管玉	欠損	長(0.9) 径0.5 孔径0.1 重(0.3)	鉄石英	
153	4 C 22	Ⅶ	石製品	勾玉		長0.6 幅0.4 厚0.2 孔径0.1-0.2	ヒスイ製カ	
154	SK10(A地区)	1	石器	石鎌		長(2.7) 幅1.3 厚0.4 重(0.9)	頁岩	
155	SK10(A地区)	1	石器	石鎌		長2.9 幅1.3 厚0.3 重0.6	頁岩	
156	SK10(A地区)	2	石器	石鎌		長2.3 幅1.1 厚0.4 重0.7	頁岩	
157	3 C 12	Ⅶ	石器	石鎌		長(2.7) 幅1.6 厚0.8 重(3.5)	頁岩	
158	4 B 4	Ⅶ	石器	石鎌	先端部、基部欠損	長(2.7) 幅2.3 厚0.8 重(3.5)	チャート	石錐の可能性
159	4 B 10	Ⅶ	石器	石鎌		長3.1 幅1.3 厚0.4 重1.3	頁岩	
160	4 B 10	Ⅶ	石器	石鎌		長1.7 幅1.0 厚0.2 重0.3	頁岩	
161	4 C 16	Ⅶ	石器	石鎌		長1.9 幅1.0 厚0.4 重0.6	頁岩	
162	4 C 22	Ⅶ	石器	石鎌		長2.4 幅1.3 厚0.3 重0.8	頁岩	
163	4 C 22	Ⅶ	石器	石鎌		長(2.7) 幅2.2 厚0.8 重(2.6)	頁岩	
164	4 C 16	Ⅶ	石器	石鎌		長1.9 幅(1.4) 厚0.4 重0.7	チャート	
165	3 C 13	Ⅶ	石器	石鎌	先端部欠損及び一部剥離	長(2.1) 幅1.2 厚(0.4) 重(0.4)	頁岩	
166	4 C 17	Ⅶ	石器	石鎌		長2.5 幅1.2 厚0.4 重0.9	頁岩	
167	4 C 16	Ⅶ	石器	石鎌		長2.3 幅1.2 厚0.5 重0.7	頁岩	
168	5 B 5	Ⅲ a	石器	石鎌		長3.4 幅1.5 厚0.9 重2.6	頁岩	
169	4 C 17	Ⅶ	石器	石鎌	先端部、基部欠損	長(1.9) 幅1.4 厚0.8 重(1.4)	チャート	
170	4 C 8	Ⅶ	石器	石鎌	先端部、基部欠損	長(1.7) 幅1.0 厚0.5 重(1.0)	玉髓	
171	3 C 13	Ⅶ	石器	石鎌	基部欠損	長(2.9) 幅1.3 厚0.6 重(1.5)	頁岩	
172	4 C 7	Ⅶ	石器	石鎌	基部欠損	長(3.4) 幅1.3 厚0.3 重(1.1)	頁岩	
173	3 B 10	Ⅶ	石器	石鎌	基部一部欠損?	長2.6 幅2.0 厚0.7 重2.0	チャート	
174	4 B 17	Ⅶ	石器	石鎌	基部欠損	長(3.0) 幅1.9 厚0.7 重(2.3)	頁岩	
175	3 C 8	—	石器	石鎌	基部一部欠損	長(3.0) 幅1.7 厚0.4 重(1.5)	チャート	
176	5 A・5 B	Ⅶ	石器	石鎌	先端部、基部欠損	長(2.1) 幅1.7 厚0.5 重(1.3)	頁岩	
177	4 C 3	Ⅶ	石器	石鎌		長3.2 幅1.7 厚0.4 重1.4	頁岩	
178	3 C 22	Ⅶ	石器	石鎌	基部欠損	長(2.4) 幅1.0 厚0.4 重(1.0)	チャート	
179	4 C 21	Ⅶ	石器	石鎌	基部欠損	長(1.8) 幅0.8 厚0.4 重(0.4)	頁岩	
180	5 A 4	Ⅷ	石器	石鎌	両端部欠損	長(2.2) 幅1.1 厚0.5 重(1.2)	頁岩	
181	4 A 19	Ⅶ	石器	石鎌	基部欠損?	長(3.5) 幅1.4 厚1.0 重(3.6)	頁岩	
182	4 C 16	Ⅶ	石器	石鎌	基部欠損?	長2.5 幅1.8 厚0.6 重2.5	チャート	
183	4 C 16	Ⅶ	石器	石鎌		長2.4 幅2.1 厚0.5 重2.1	頁岩	
184	4 C 17	Ⅶ	石器	石鎌		長3.2 幅2.0 厚2.0 重2.7	頁岩	
185	4 C 1	Ⅶ	石器	石鎌	先端部欠損	長(2.1) 幅2.3 厚0.5 重(2.2)	頁岩	
186	4 C 3	Ⅶ	石器	石錐	先端部欠損	長(3.3) 幅2.5 厚1.1 重(6.2)	頁岩	

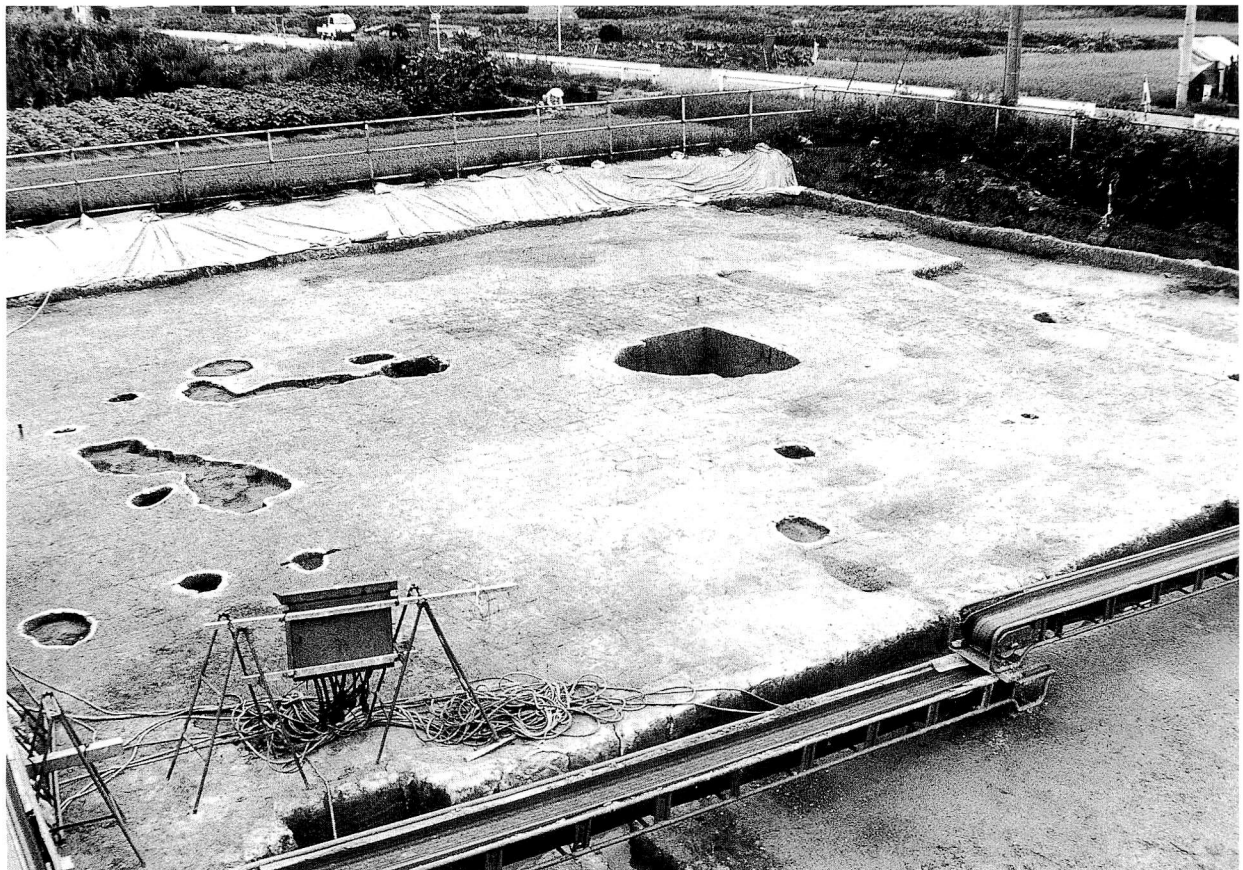
図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種など	遺存	大 き さ	材質など	備考
187	3 B 24	Ⅶ	石器	石核	完形	長18.8 幅9.0 厚8.0	頁岩	

図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種など	遺存	法量など（長さ：cm、重さ：g）				成形・調整など	備考
						口 径	器 高	底 径	そ の 他		
188	SK 1 (B地区)	2	木製品	曲物底板	1/2				残存部長15.0 幅6.7 厚0.7		
189	SK 1 (B地区)	2	木製品	下駄	一部欠損				残存部長20.0 幅8.5 厚2.8		差歯 表面の一部炭化
190	SK38 (B地区)	3	木製品	箸	一部折れ				長14.0		

図版No	出土遺構地	出土層位	種別	器種など	遺存	法量など（長さ：cm、重さ：g）				成形・調整など	備考
						口 径	器 高	底 径	そ の 他		
191	SK38 (B地区)	1	漆器	椀	1/3欠損	(12.5)	4.5	7.8	厚0.3	ロクロ挽き	横木取り



7B.8Bグリッド付近(Ⅱa層上面.北から)



7C.7Dグリッド付近(Ⅱa層上面.北西から)



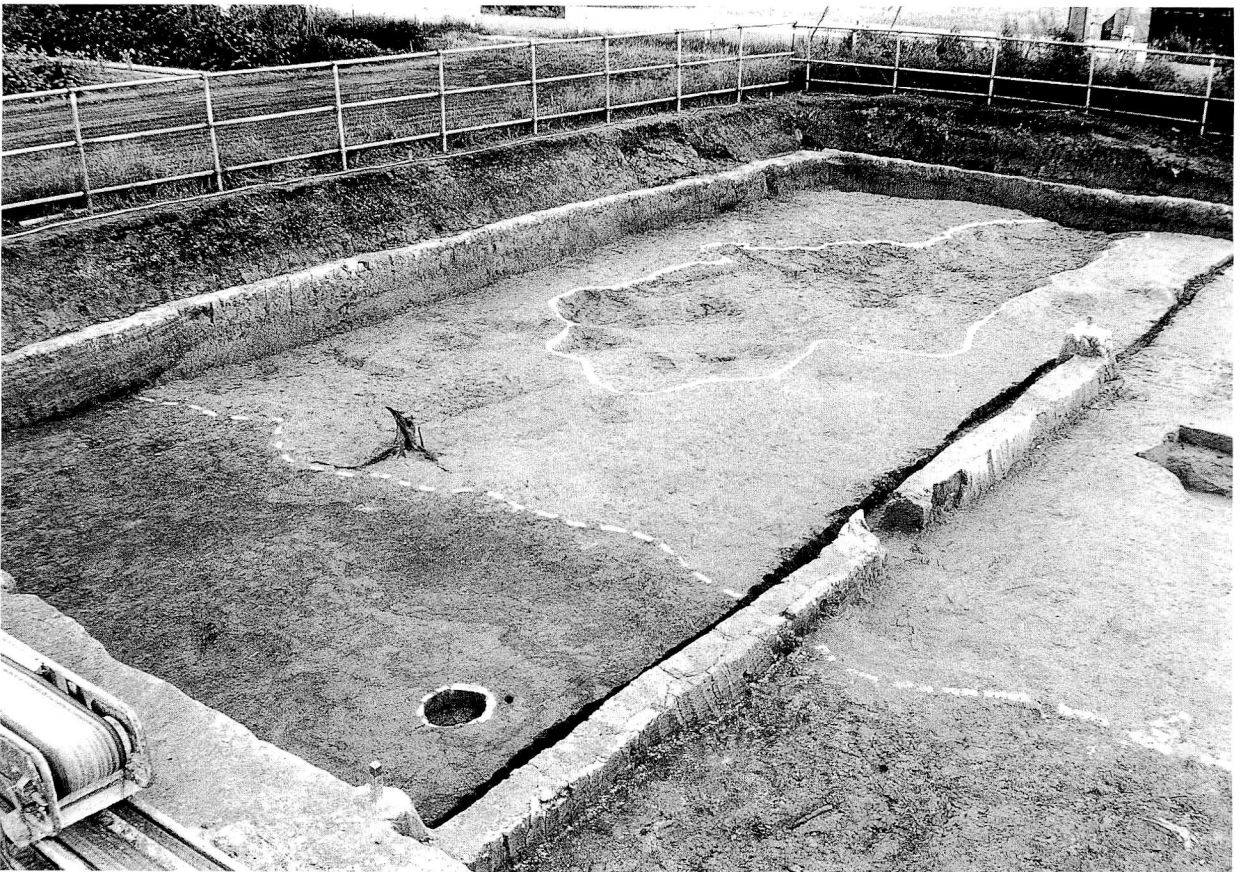
4 C.5 Cグリッド付近 (Ⅱ a層上面.北西から)



4 D.5 Dグリッド付近 (Ⅱ a層上面.西から)



2 C. 3 C. 2 D. 3 D グリッド付近 (Ⅱ a 層上面. 南西から)



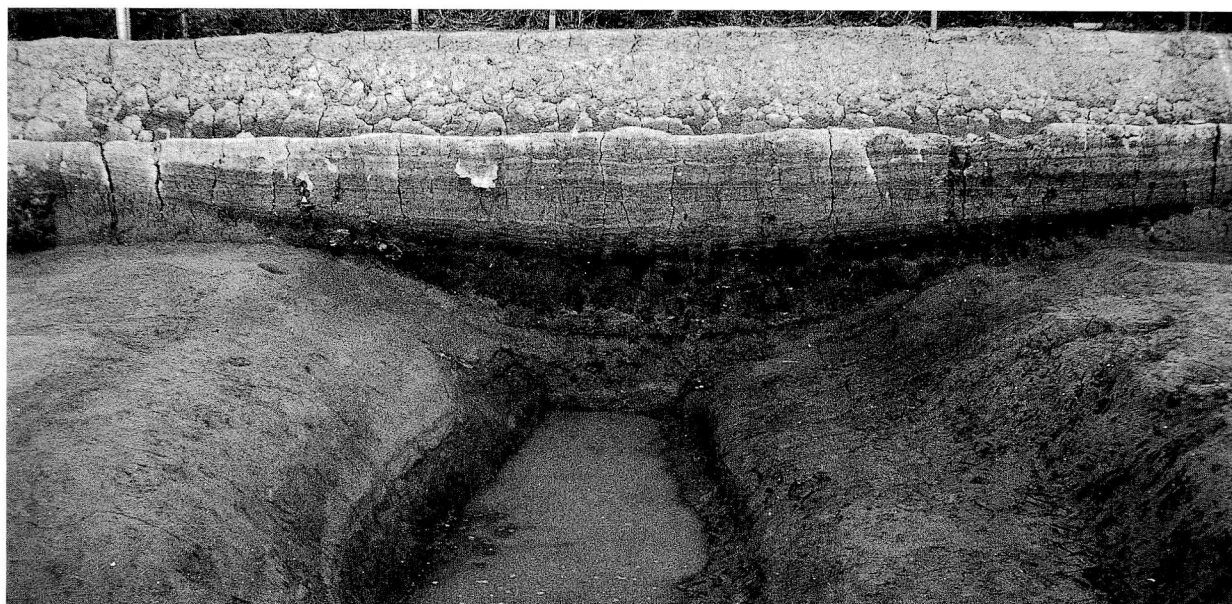
7 D. 8 D グリッド付近 (Ⅲ a 層上面. 北西から)



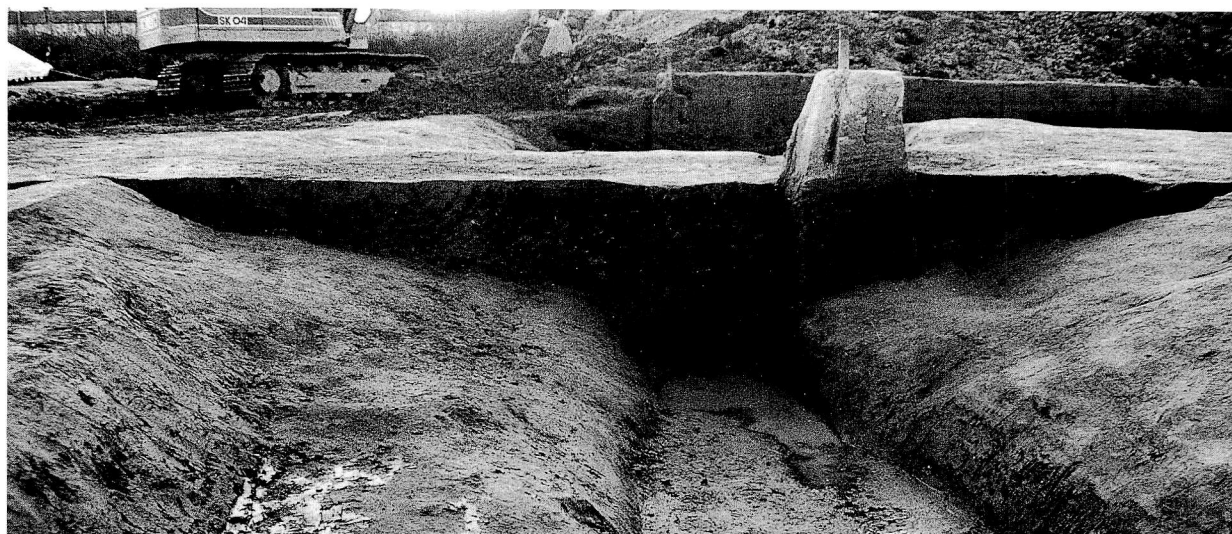
7 C. 8 C グリッド付近 (Ⅲ a 層上面. 北西から)



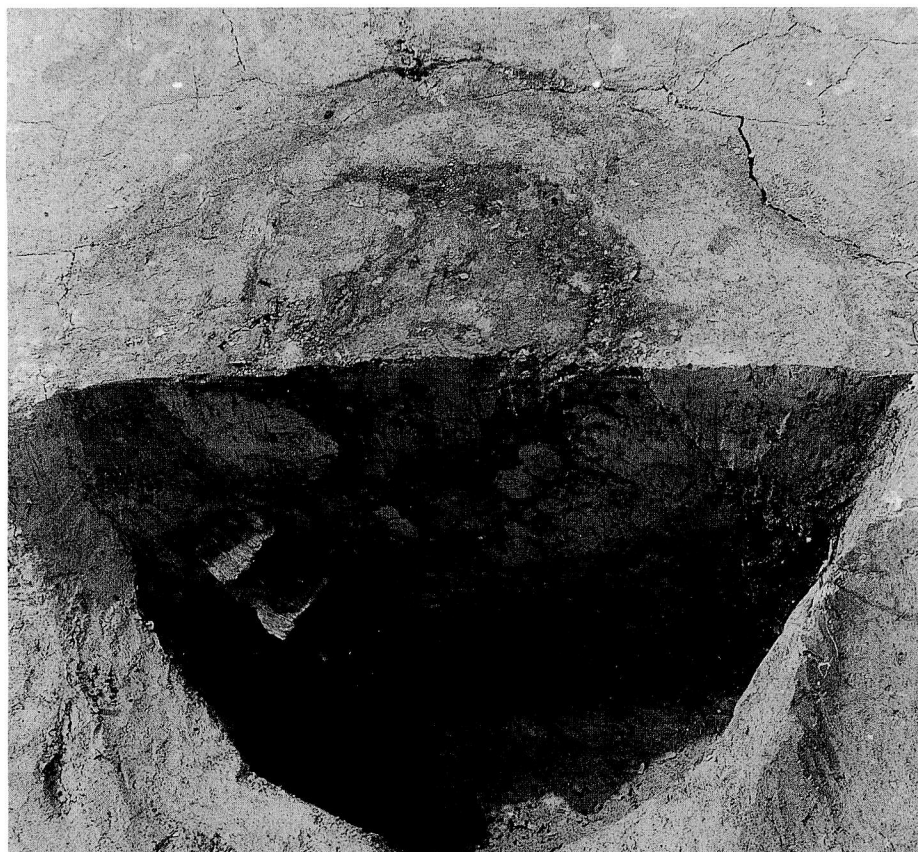
6 C. 6 D グリッドと 7 C. 7 D グリッドの間の溝状地形 (西から)



溝状地形のセクション（6 D. 7 Dグリッド東壁,西から）



溝状地形のセクション（Dライン,東から）



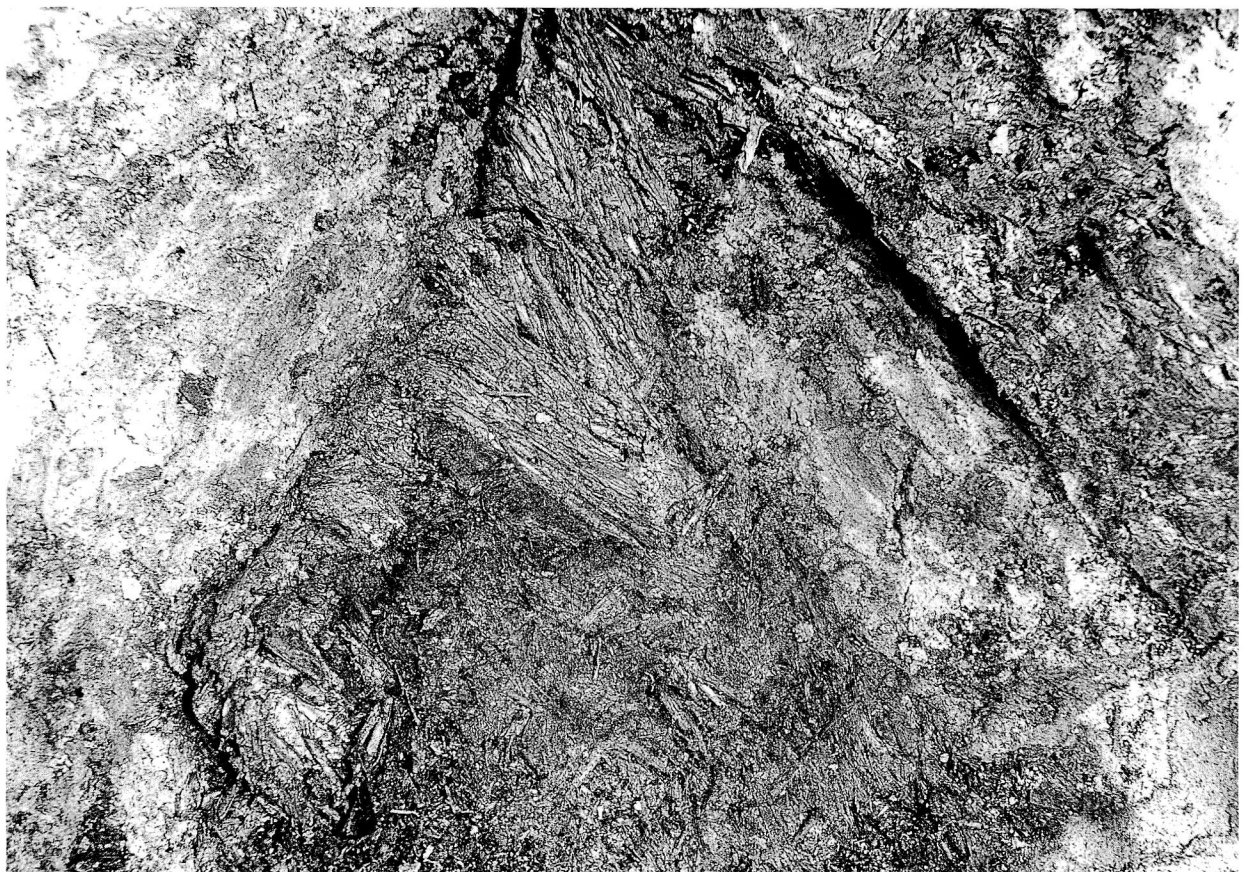
B地区 SK1 セクション (南から)



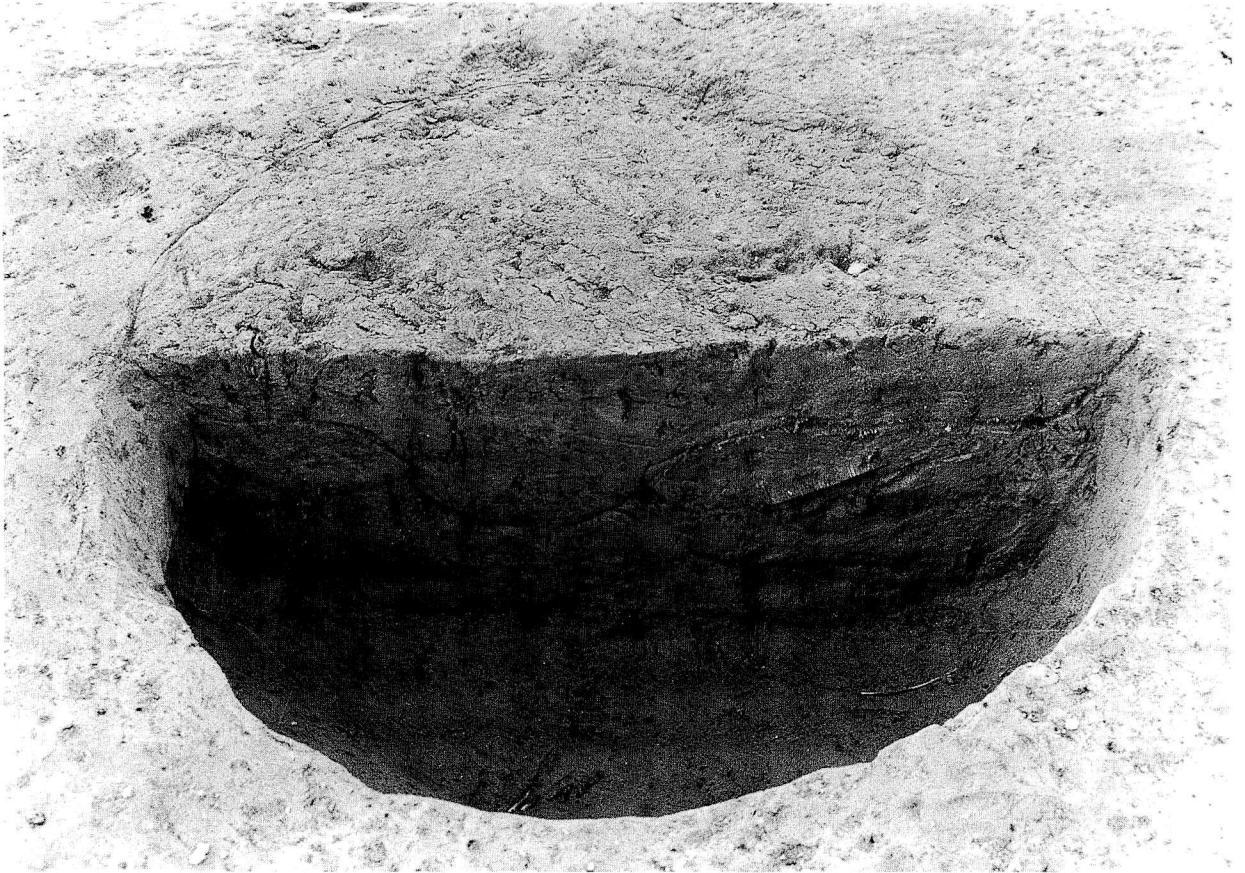
B地区 SK1 炭化物出土状況



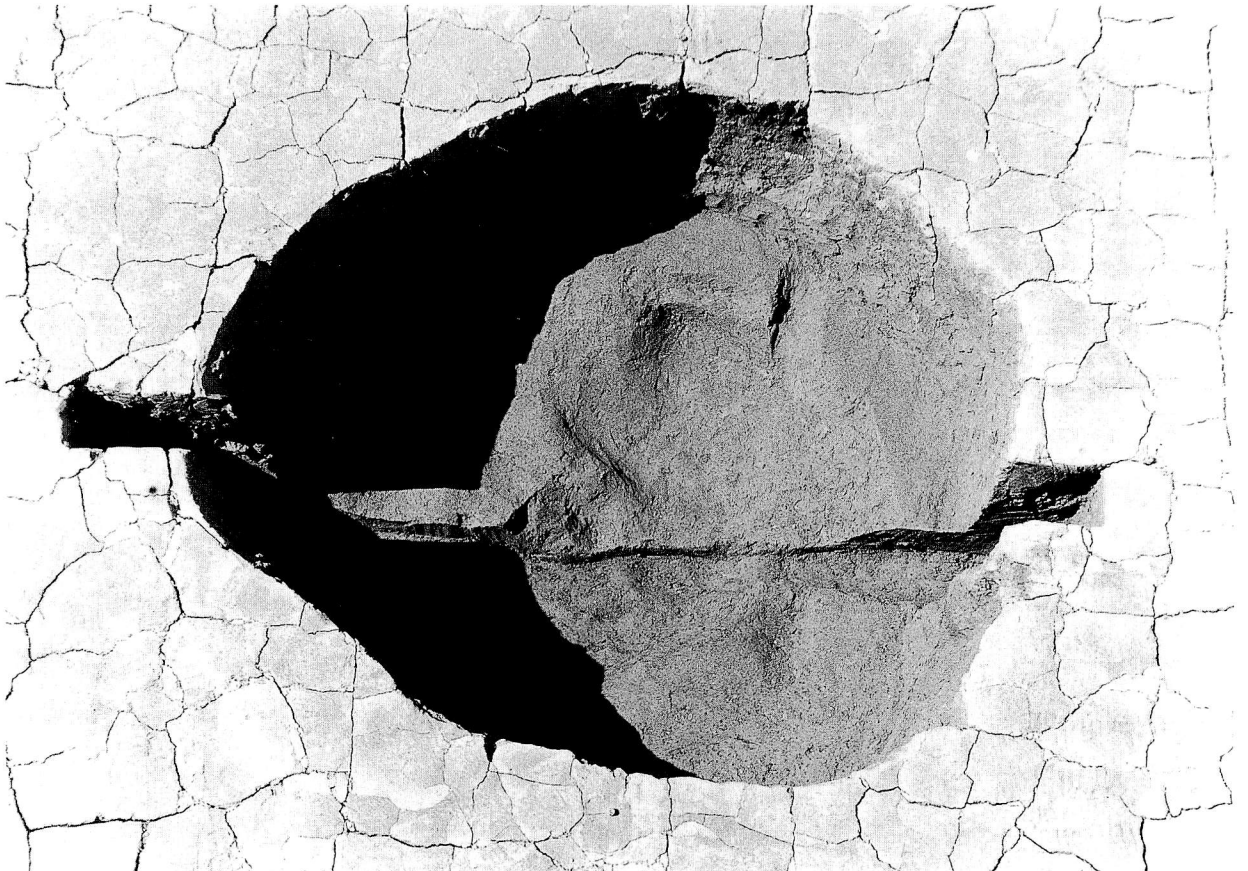
B地区 SK 1 完掘状況（南から）



B地区 SK 1 出土炭化物



B地区 SK6 セクション (南から)



B地区 SK6 完掘状況 (南から)



B地区 SK24 (南から)



B地区 SK31 (西から)



B地区 SK31 土師器甕出土状況



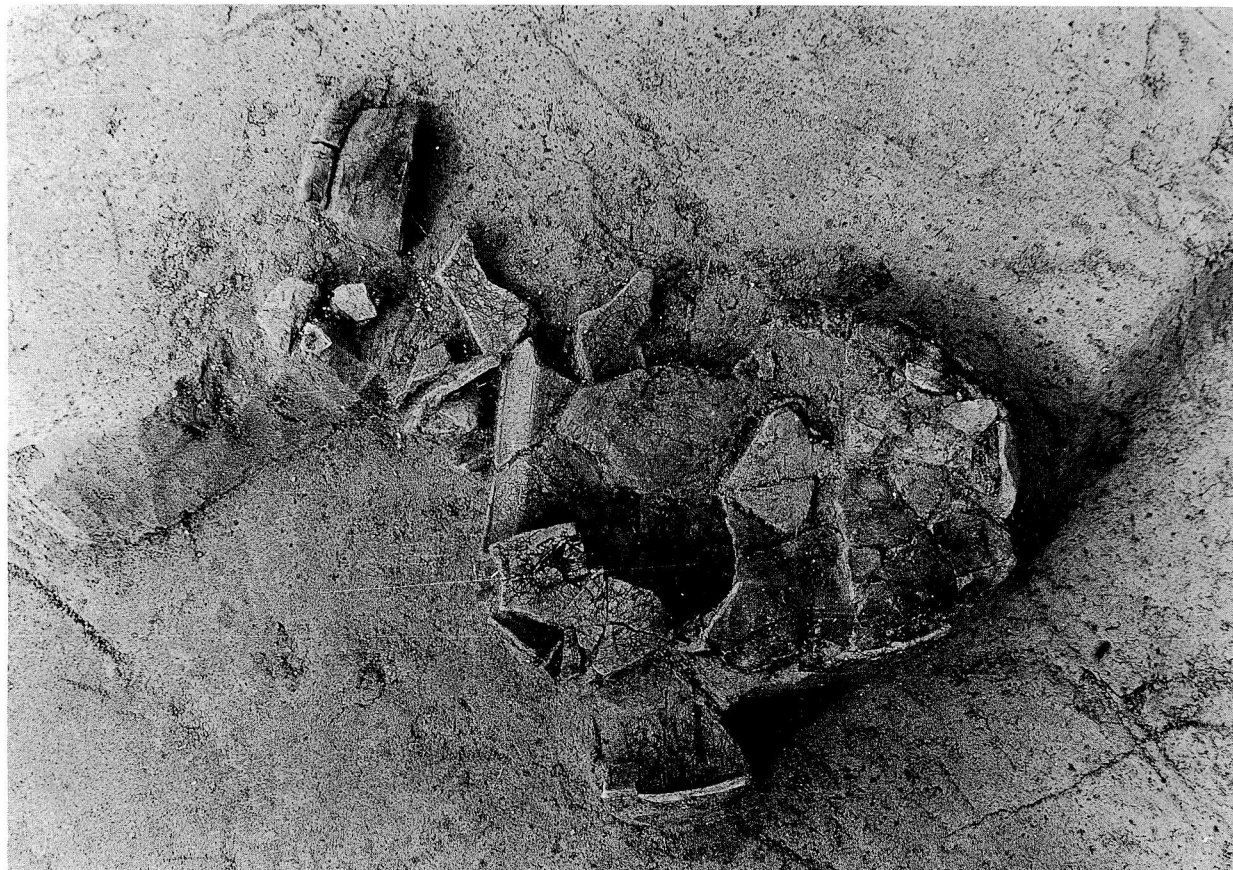
B地区 SK38 漆器出土状況（北から）



B地区 SD 6 (南から)



B地区 SD 7 (西から)



土師器甕出土状況（8B9グリッド.Ⅱa層中）



漆器出土状況（4D18グリッド.Ⅱc層中）



ガツボ中の土器等出土状況（4 Bグリッド）



石核出土状況（3 B24グリッド.VII層中）



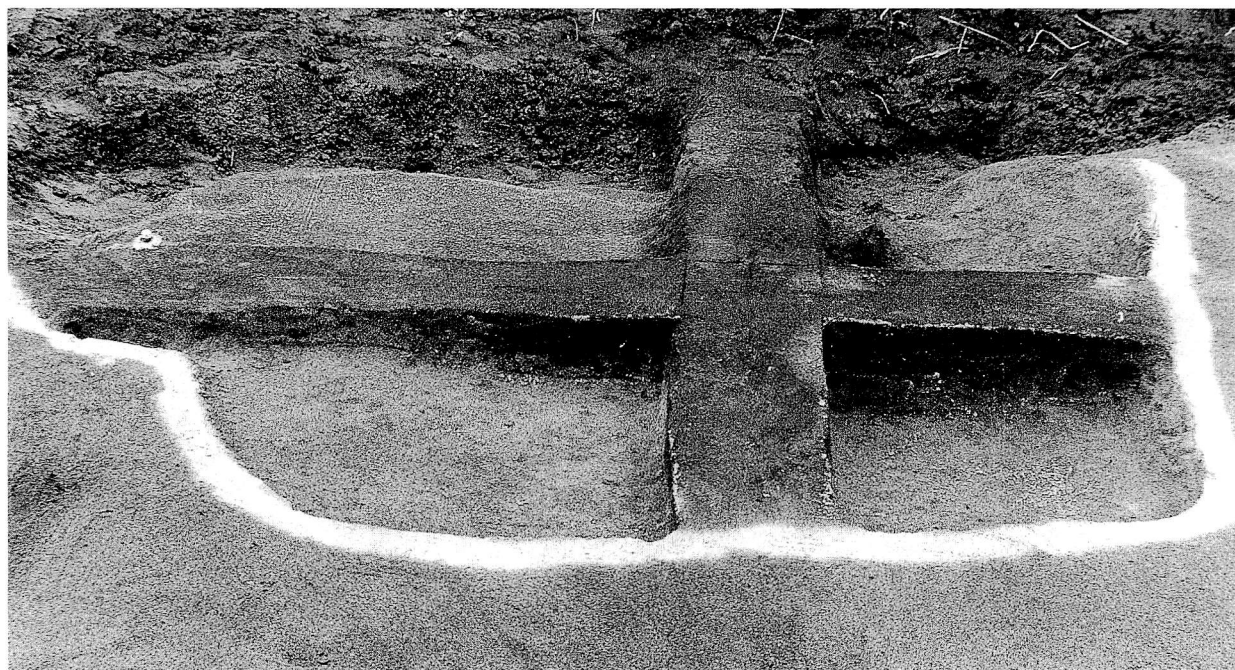
紡鐘車出土状況 (2Dグリッド.Ⅱc層中)



2Bグリッド付近 (Ⅰ区層上面.北西から)



3 A. 3 B. 4 A. 4 B グリッド付近 (区層上面.北から)



A地区 SK 1 (南から)



A地区 SK8 (南から)



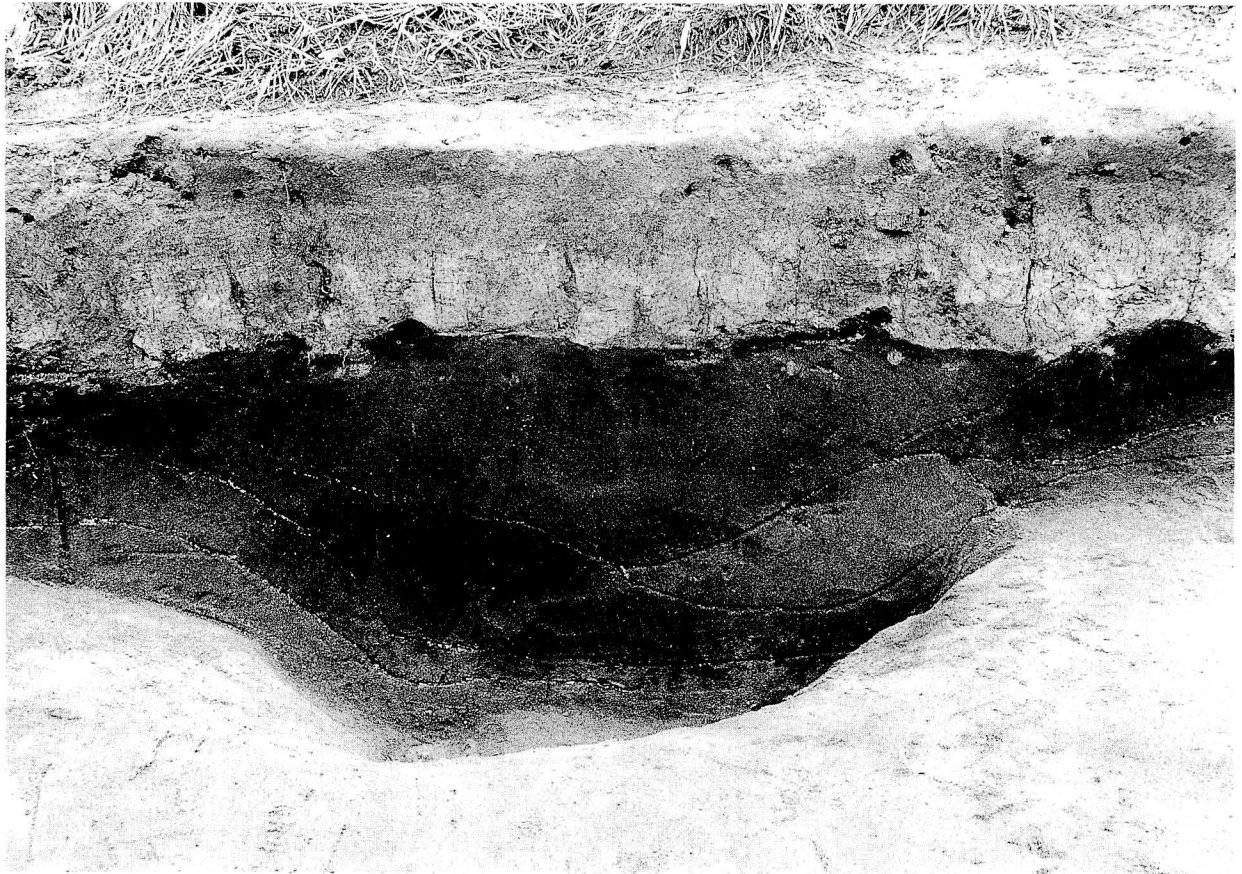
A地区 SK10 (西から)



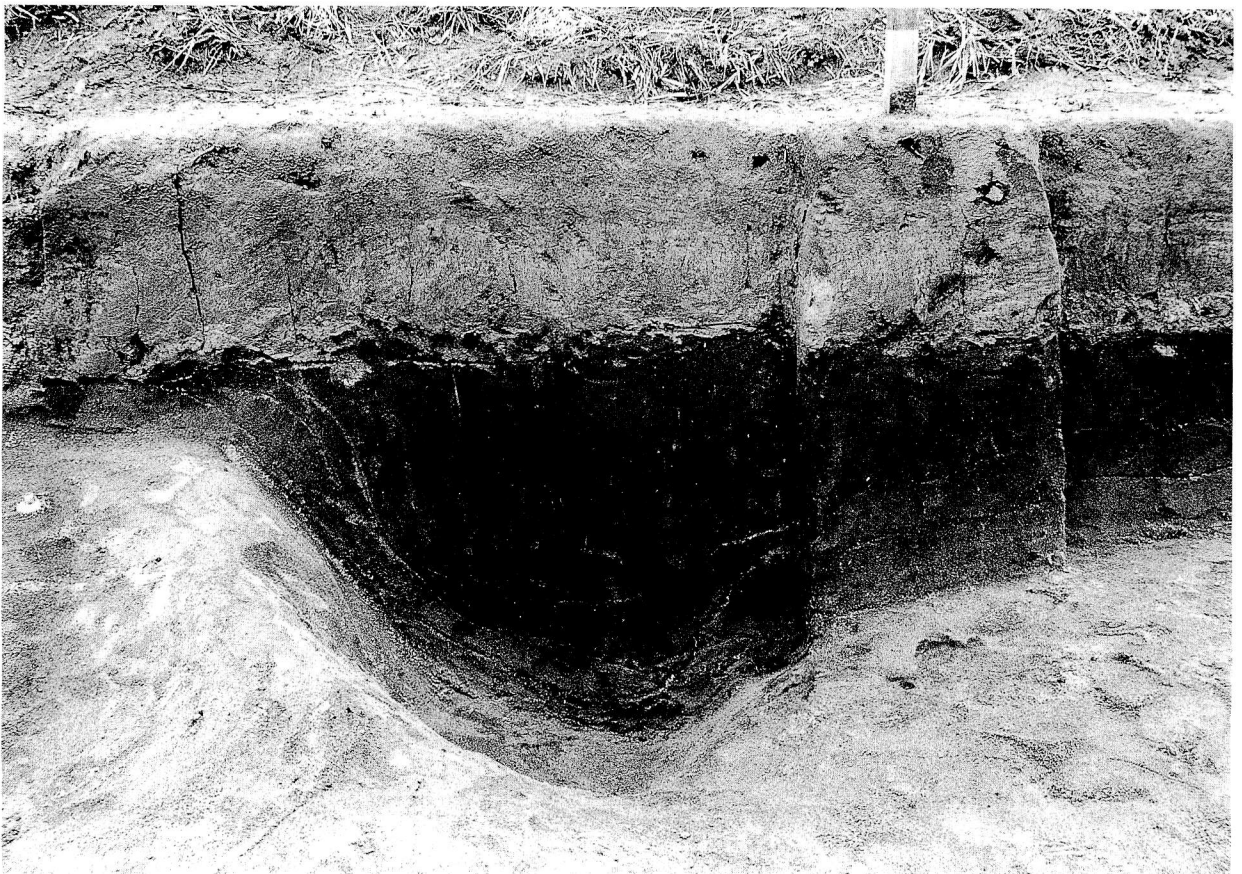
A地区 SK14 (北から)



A地区 SD 4 (左) とSK17 (右) セクション (東から)



A地区 SK19セクション (東から)



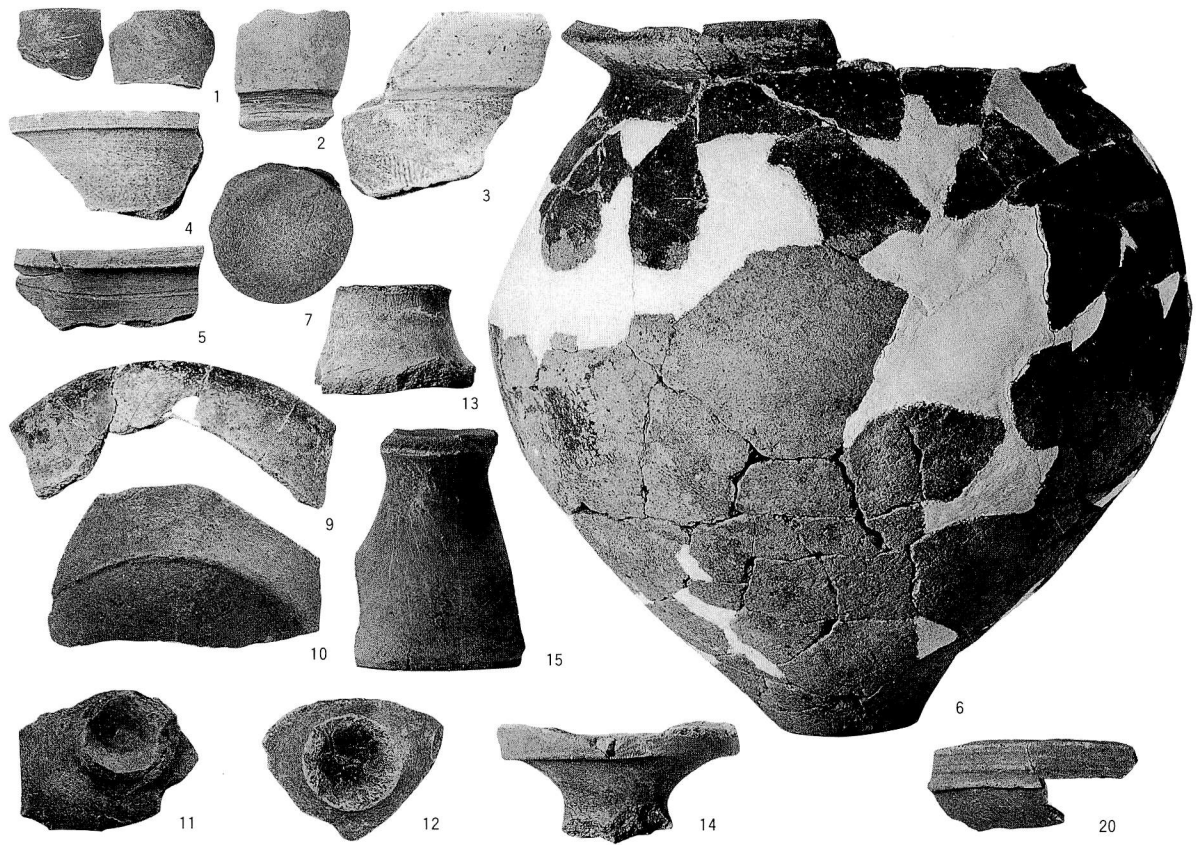
A地区 SK20セクション (東から)



A地区 SD 1 (東から)



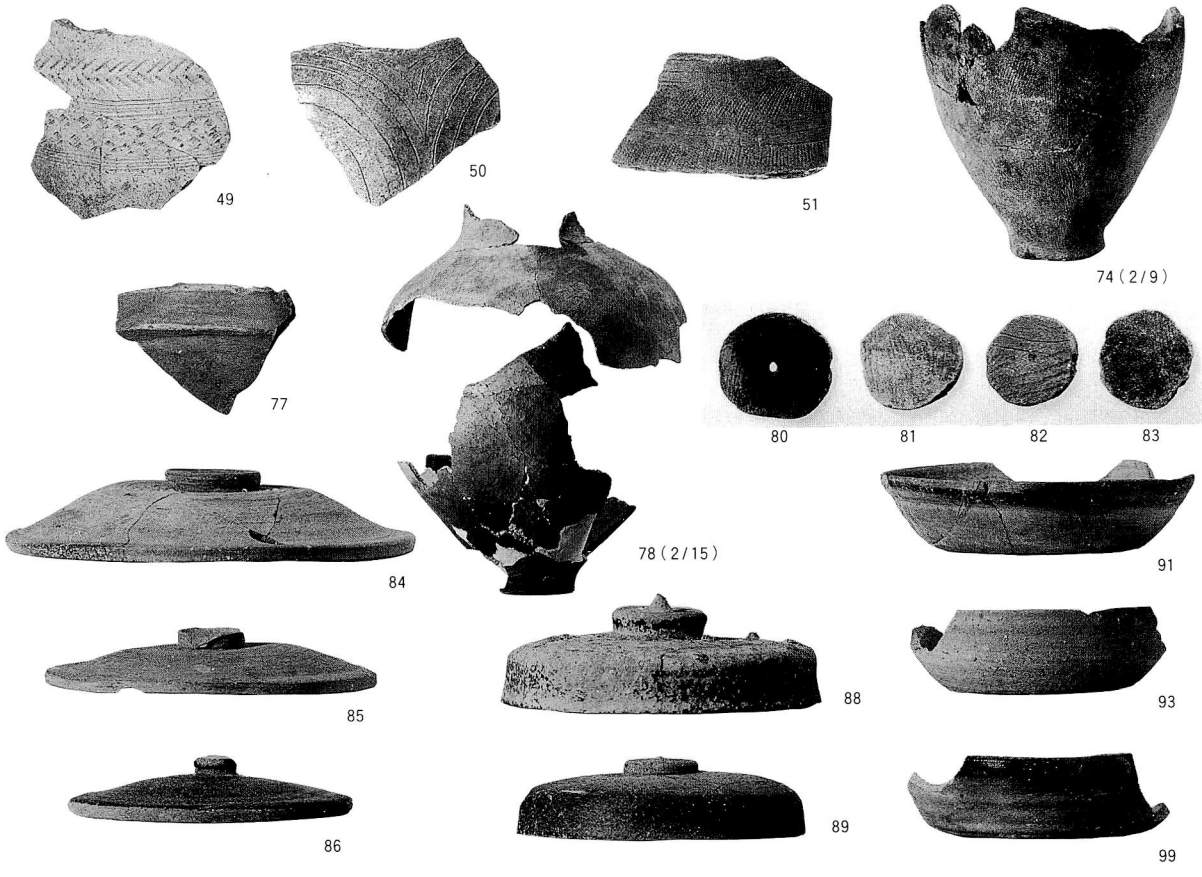
A地区 SD 1 (東から)



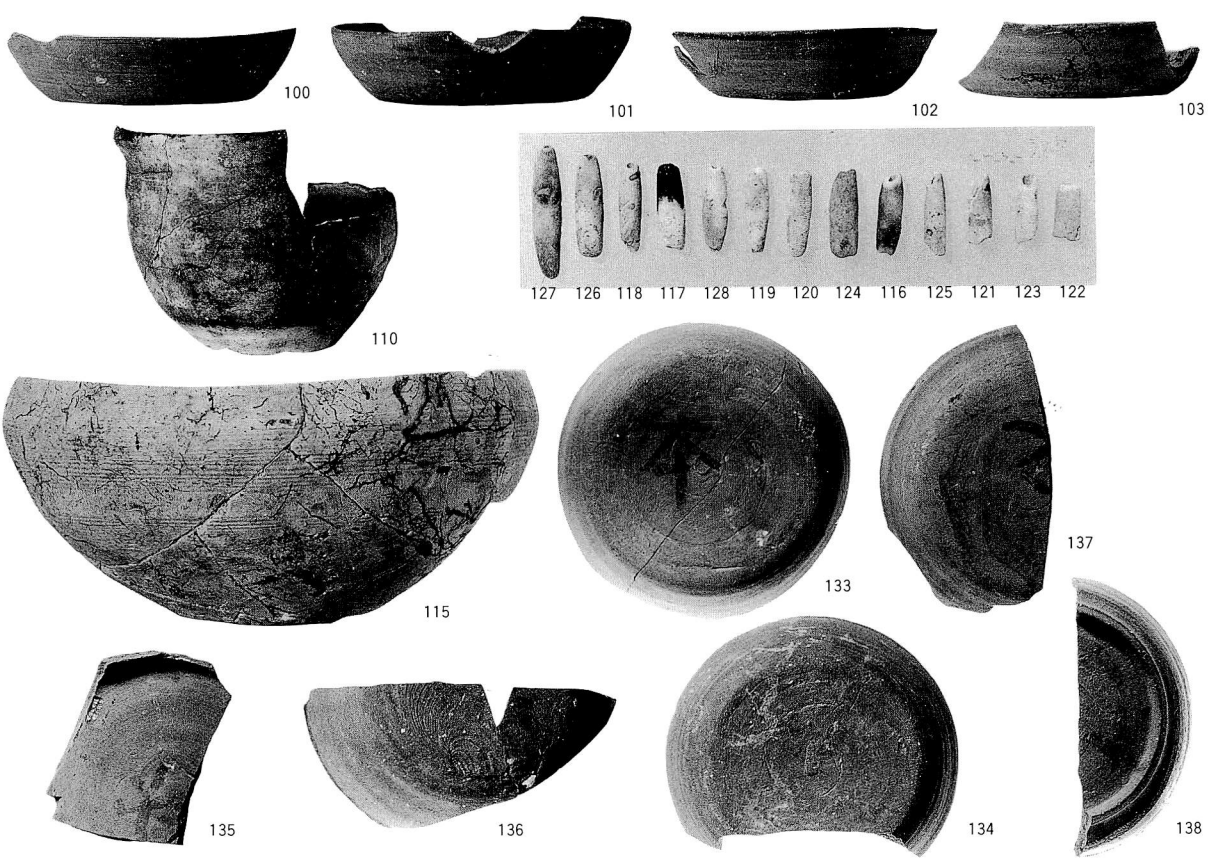
出土遺物(1)



出土遺物(2)



出土遺物(3)

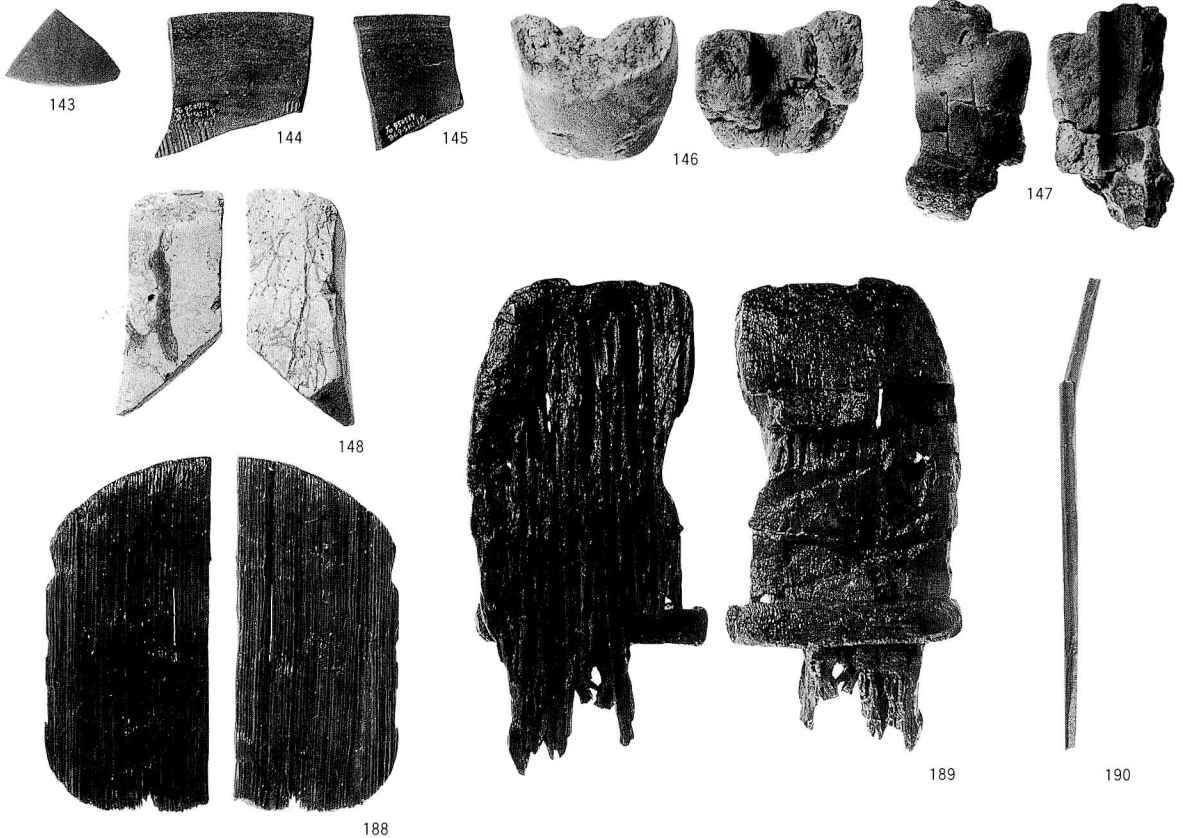


出土遺物(4)

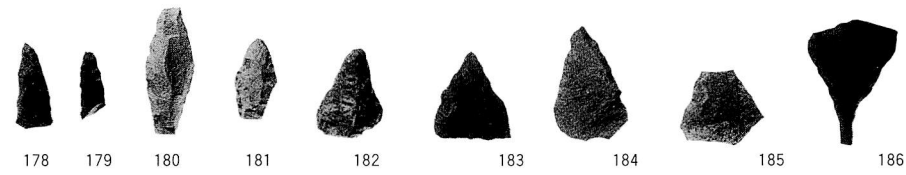
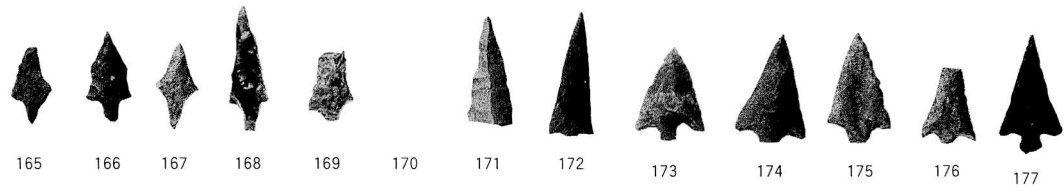
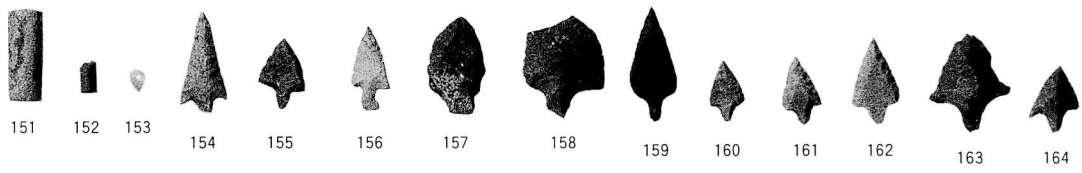


132 (1/4)

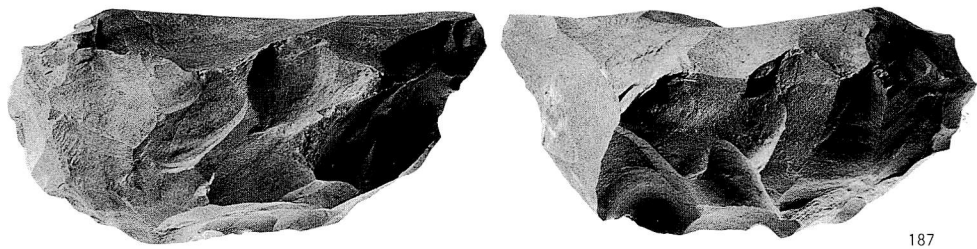
出土遺物(5)



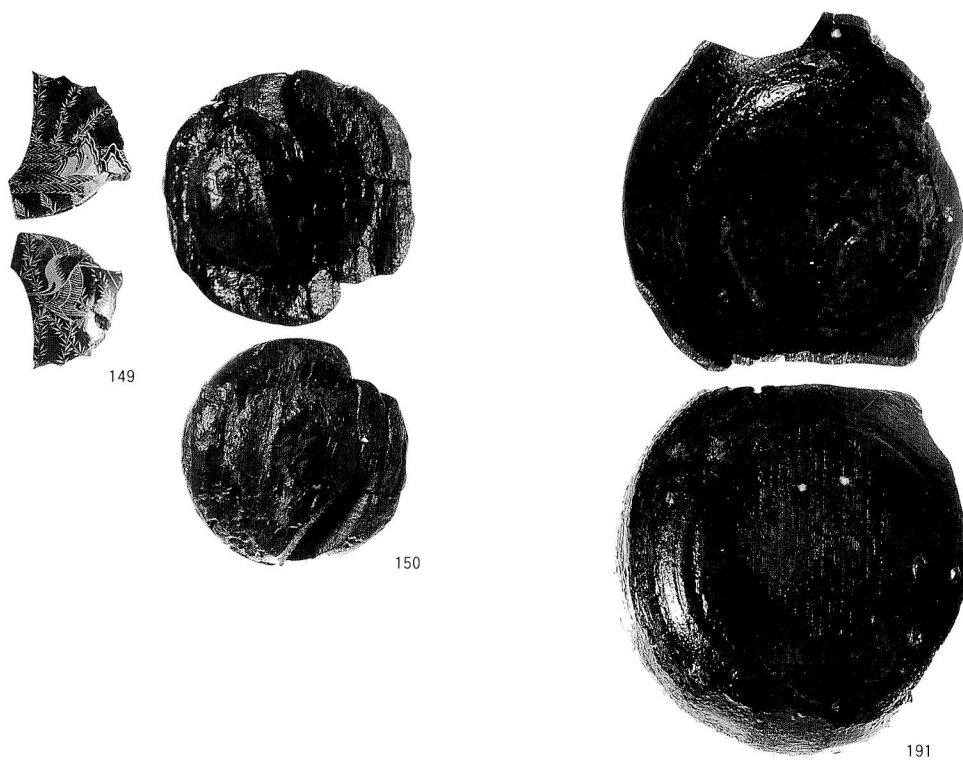
出土遺物(6)



出土遺物(7)(全て1/2)



出土遺物(8)



出土遺物(9)

報告書抄録

ふりがな	いするぎいせき								
書名	石動遺跡								
副書名	平成7年度発掘調査概報								
巻次									
シリーズ名									
編著者名	廣野耕造								
編集機関	新潟市教育委員会								
所在地	〒951 新潟県新潟市学校町通1番町602番地1								
発行年月日	西暦1996年3月29日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″				
いするぎ 石動遺跡	にいがたけんにいがたしほんじよあざいうら 新潟県新潟市本所字居浦845ほか	15201	85	37度 54分 26秒	139度 8分 14秒	19950626) 19951129	2,600	県道工事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
石動遺跡	遺物包含地	弥生・古墳・平安	土坑・溝	弥生土器、古墳時代土師器、平安時代須恵器・土師器					

石動遺跡 平成7年度発掘調査概報

発行日 平成8年3月29日
 発行 新潟市教育委員会
 新潟市学校町通1番町602番地1
 〒951 電話(025)228-1000
 印刷 (有)太陽印刷所
 新潟市和合町2丁目4番18号
 〒951 電話(025)265-3101